英国春秋

２０２０年　　春号
（　令和　２年　）
ＩＳＳＵＥ　３６
発行　　英国日本人会

はじめに

石ばしる　垂水の上のさ蕨の　萌え出づる春になりにけるかも
（万葉集八巻 1418）

「岩の間を流れ落ちる滝の傍に春を告げる蕨を見つけて・・・」と志貴皇子が春到来の歓びを大らかに謳いあげた作品。まるで、流れ落ちる滝の音が聞こえて来るような、すぐそばのシダの葉蔭から膨らみかけた蕨の芽が伸び出しているのが浮かんでくるような、とても清々しい春の歌ですね。皇子と競うわけではありませんが、我々だって待ちわびた春の到来は嬉しいもの。典雅なうたは詠めないとしても、万葉の世界に遊べる心は先祖から引き継いでいるようです。最近、AI の技術向上が目覚ましい発展を遂げていると耳にします。将来、人間の知能を超えて、AI が世界を制覇する日が来ると予言する科学者も出てきました。しかし人間の“感性”までそんなに簡単に機械化することが出来るのでしょうか。たとえ、AI がチェスのワールドチャンピオンを打ち負かし、π の小数点以下の数字を瞬時一億桁並べることが出来たとしても、滝の傍の蕨の芽に春の歓びを感じ取るのは無理なことでしょう。

同じ春でも“アラブの春”は待ち望んだ春とは言えない結果を生みました。歴史にタブーの、“もし”2010 年 12 月 17 日チュニジアで野菜売りの男が、市の検査官から商売の許可を持ってないことを理由に、頬を打たれ、荷車とはかりを没収されていなかったら・・・と思わずにはおれません。それに対する抗議、焼身自殺、そして仲間たちの暴動がジャスミン革命へ発展・・・とこの事件が起こっていなければ、世の中はずいぶん変わっていたことでしょう。過去１０年間、リビア、エジプト、イエメンでは政権打倒、内戦、クーデターが勃発、シリアはいまだに泥沼の内戦状態、イラク、レバノン、アルジェリアは大紛争、ヨルダン、モロッコ、オーマンでは抗議により改革、その他これら隣国でも火の粉は飛び散っているようです。もっともそのアラブの春の火付け国だったチュニジアが唯一、民主体制への移行を実現することが出来たようです。

地球の温暖化が気になります。太陽エネルギーが上昇しているのは自然の要因でしょうが、温室効果ガスによるのは、これは全く人為的ですよね。科学者によれば、森や海が吸収できる倍以上のガスを我々は排出しているそうです。河川氾濫による家屋浸水やオーストラリアの森が燃えているのをテレビで観て、何とかしなければと焦る思いです。最近、我が家のすぐ近くに電気自動車用のバッテリー・チャージャーが２基設置されました。毎日通りかかるのですが、充電をしている車を一度も見かけたことはありません。２～３年前、お隣は太陽熱パネルを屋根にとりつけました。何でもご主人がその販売会社に勤めているからとのことでしたが、最近会社が倒産したとかで、昼間から暇そうです。政府の対策だけに頼らず、電気自動車に買い替えるとか、太陽熱を利用するとか、と色々考えてみるのですが、そうこうしている内に手遅れにならないと良いのですが。

１月３１日の夜１１時、ビッグ・ベンの鐘が１１回目を打ち終わった瞬間は少々しんみりとしてしまいました。UK が EU のメンバーでなくなるという事は、日本人の私にとってどういう意味があるのかと自問してみました。今年いっぱい猶予期間があるとは言うものの、EU がそう簡単に自由貿易協定（FTA）をかつてのメンバーと好条件で結ばせてはくれないでしょう。UK が TPP 協定（環太平洋経済連携協定）との案も出ているそうですが、それではついでに EU も仲間に入ってくれたらと虫の良いことを考えています。まさに Brave New World を目指しての船出、短期間で辿り着ければ良いのですが。

＊．＊　＊　　もくじ　　＊　＊　＊

はじめに		２
もくじ		３
子どものころの夢	加藤節雄	４
雪に願うこと	ビドル惠	５～　８
ー ばんえい競馬に血が騒ぐ　ー		
水 仙	ワーズワース	９
無意識との道行き	佐山菫子	１０～１１
ああ、人生	石山　望	１１～１２
忖　度	石山　望	１２～１３
英国春秋歌壇　　芽ぶきの緑	バロー典子	１４
英国春秋俳壇　　ヒヤシンス	エリオットつや子	１５
英国と日本　それぞれの医療事情	小谷信行	１６～１７
誰もがメディアになれる時代	渡邉伸悟	１８～１９
鳩　（その３）	ウイリアムズ百子	２０～２２
父母から聞いた話	須永静江	２３～２５
映画同好会を運営して思う事	渡邉道英	２６～２９
裏話フィルムエキストラ・ちょい間の役	早乙女健之	２９～３２
越前、能登そして飛騨へ	小川のり子	３３～３５

特別寄稿

小谷信行氏　　ＪＧＭＣ前院長・小児科専門医

佐山菫子氏　　ユング派心理分析家

（アイウエオ順）

子どものころの夢

加藤節雄

私の父親は朝日新聞の新聞記者だった。ただし、私は父が仕事をしているのを見たことがない。私の生まれた直後に父は徴兵されてシンガポールへ行ってしまった。戦争中は南多摩郡の方へ疎開していた。終戦とともに父は帰国したが結核を患っていた。それ以来、父の療養生活が始まった。当時の結核は贅沢病と言われ、おいしいものを食べ、高価な薬を飲んでぶらぶらしていなければならなかった。母親が働きだした。我が家は貧乏のどん底にあった。父は保養所へ入院したり、帰って来たりの繰り返しで、私が 12 歳のときに逝去した。

私は小学校を 3 回転校している。新しい学校や環境に馴染むことや、母親が仕事から帰るまでに買い物をしたり、その他家事一般をしなければならず、将来何になろうかということを考える余裕なんて当然なかった。学校のクラスの中には父親がいて、土地や財産を持ち、生活に困窮せずに楽しく暮らしている生徒もいたが、我が家と言えば、何の財産もなく、それこそ「その日暮らし」の様な状況だった。

そんな中でも、私は父の仕事だったジャーナリズムに興味を持っていた。漠然としたアイデアだったが、何か自分の力でやって行ける職業の様に思えた。父から仕事の話を直接聞いたことはないし、将来何になりたいのかと聞かれた覚えもない。母親からは父が 1932 年に起きた 5・15 事件でスクープをしたことや、1928 年のアムステルダム・オリンピックの金メダリストの織田幹雄(三段跳び)と早稲田大学と朝日新聞社で同僚だったことなどを聞かされていた。

その頃のジャーナリストになりたいという夢は、電車の運転手になりたい、お医者さんになりたい、という男の子の夢と何ら変りもないのだが、高校生の頃に大学受験を控えて急に現実的なものになった。多分、父親の仕事ぶりを実際に見ていないので、思い描いてかってにジャーナリストのイメージを作り上げていたのかも知れないし、また学校の成績も特にこれといった学科に秀でていたわけでもなく、オールラウンドでそれなりの成果を上げていたこともあった。

早稲田大学の政治経済学部に新聞学科というのがあったのでそこを目指した。学科の学生は 50 人で、ほとんどが将来はマスコミ関係で仕事をしたいという学生だった。励みにもなった。授業では現役の新聞記者が来て記事の書き方や取材の方法を教えてくれた。4 年生のとき朝日新聞の試験を受けた。結果は見事に落ちた。1964 年の東京オリンピックの翌年で採用人数が極端に少なかったのも災いした。

翌年また入試をトライしようと決めていた時、ある知人が英国系のニュース通信社の東京支局が大学出身者を募集しているという話を持ってきてくれた。取り合えず面接に行ったら、明日から来てほしいと言われて戸惑った。結局この通信社に 4 年ほど勤めたが、この通信社はニュース写真の通信社で、初日から私はカメラを渡され、取材に行くように言われた。早稲田の新聞学科では報道写真のことは教えてくれなかった。私は写真のことは全く分からなかった。自分のカメラも持っていなかったし、現像も出来ないし、プリントも出来ない。最初はカメラにフイルムを装填することもできなかった。この出来ない尽くしの新米カメラマンが、4 年後には一応写真撮影が出来る様になり、現像、プリントも OK、無数の現場を経験することにより、取材の仕方も習得、1970 年にはこの通信社を退職してフリーランスとなり英国へ渡った。

英国では写真が撮れるフリーのジャーナリストとして、日本のメディアに英国のニュースやトピックスを送ってきた。主に新聞、雑誌の仕事が多かったが、80 年代にはヨーロッパ全域をカバーした。英国の日本人社会のためにコミュニティー新聞を発行したこともある。又、英国関係の著書も 16 冊になった。

大新聞社の記者だった父親の影響でジャーナリストを目指した息子は、それを目指しながらも、大分違う方向に向かってしまった。父親が生きていたら何と言うであろうか。時代が違うので単純に比較することは出来ないが、父親の頃に比べて日本が国際的になり、メディアも外国のことを積極的に取材するようになった。その意味では私はラッキーであり生き残れたのかも知れない。

フリーランスを続けて久しいが、フリーランスは厳しいし、自分ですべてをしなければならないが、その反面得るところも多い。他人のためではなく、自分のために仕事をしている充実感もある。いつも思うのだが、この自分のこの独立心はどこから来たのだろうか。子どもの頃に父親を亡くし、父親を見て育つことがなく、すべて自分で判断してやらなければならない状況から生まれてきたものかも知れない。そうすると、やはりこれも父親の影響ということになるのであろうか。

『雪に願うこと』＝ ばんえい競馬に血が騒ぐ

ビドル　惠

帯広競馬場の建物や厩舎が、夜の暗さからようやく解放されて形と色を取り戻す頃、競技コースと並んで設けられた練習用走路では、早くも二歳馬の調教が始まる。晩秋から冬の早朝は薄暗く、地表には白い靄のかかった曖昧な明るさしか無いけれど、空を覆っている雲が割れて一筋の朝の光が差し込んでくると、競技場の北に流れる十勝川の向こう、音更(オトフケ)町の家々や遠い日高の山並みが、薄っすらと茜色に染まっていくのが見える。川のこちら側は夜の気配がしっかりと残っていて、走路の地面は黒く沈んでおり、その薄明かりの中で、大きな馬達が真っ白い息を吐きながら橇を引く。帯広の街は未だ眠っていて、周りには何の物音も聞こえず、規則正しい馬の鼻息と、踏み締める蹄の音、調教の低い声がするばかりだ。

早朝の練習

これは、2006 年の 5 月に公開された映画『雪に願うこと』の一場面。背景に、ギターで奏でられるテーマ曲“What the snow brings”の美しい旋律が流れる。都会の生活に敗れて故郷の帯広市に戻り、ばんえい騎手となる青年の話で、鳴海章の小説“輓馬(ばんば)”が原作。第 18 回・東京国際映画祭で、グランプリ賞、監督賞(根岸吉太)、主演男優賞(伊勢谷友介)、観客賞の四冠に輝いた。

今春号は“私がなりたかったもの”がテーマ。絵描きになりたかった事と、紙を切って遊ぶ事に夢中だった私は、曲がりなりにもそれを生業とするに至り、書く事は無いのかなぁ～と思っていた。しかし、何年か前にこの映画を見て、子供の頃の興奮が走馬灯の様に蘇ったので、これなら書けるかも知れない！と気付いた。とは言え、映像でさえ実際に見る“ばんえい競走”の迫力は捉え難いから、私の稚拙文で何処までお伝え出来るか？ 皆様の想像力をフル回転させて、お読み頂けるよう願います。

帯広競馬場で行われる競馬は、サラブレッドによる平地競走や障害競走では無く、大きな馬に、騎手と重量物を積載した鉄製の橇を曳かせ、二箇所の障害(台形状の小さな山)を設置した直線 200m の砂地コースで、輓曳力と登坂力、持久力や速さ、騎手の技術などを競う、北海道独特のばんば競走(ばんえい競馬)だ。

この競馬の起源は開拓時代からで、最初は農耕祭の余興として、農民自慢の農耕馬を丸太の両端に繋ぎ、引っぱり合わせる力比べだったとか。それが次第に重い荷の曳き比べになり、大正 4(1915)年に函館市の五稜郭敷地内で、40 間(73m)の平坦コースを進む“輓馬実力競走”が、畜産共進会の主宰で行われて以来、北海道の各地に、“ばんば競走”或いは“草ばんば”となって根付いたのである。

放牧された道産子

「ばんえい競馬って、道産子(どさんこ)が橇を曳くやつですよね？」と言われる事があるけれど、実際は道産子では無く、通称“輓馬”と呼ばれる大きな輓曳馬(ばんえい馬)が使われる。

道産子の体高は、前脚の蹄から“き甲”と呼ばれる、首と背骨の境目までの高さが 120～130cm と小さく、ポニーに分類される使役用の南部馬がルーツだ。北海道が未だ蝦夷(エゾ)と呼ばれていた頃に、東北から開拓団によって持ち込まれたもので、この馬は急いで歩いても、背中の上下運動が少ない側対歩をするので、荷崩れや荷傷が少なく、人が乗ってもあまり疲れない等の利点を持っていた。冬の到来前に人間だけが本州に帰り、馬は野に放して越冬させた後、春に再び捕えられて使役に使われたそうだ。北海道の極寒を、雪の下の草や新芽などを探して生き抜いた、頑健で賢い馬だけが残って繁殖/半野生化したものを、道産子と呼ぶようになったのである。賢いが故に人に懐いて温厚な馬と、人に反抗する馬に二極化すると言う説も有り、現在その数は少ない。

ばんえい競走に使われる輓曳馬は、明治の初期になって北海道の開拓が軌道に乗ると、木材や重い荷を曳く力に優れた、大型の農耕馬が必要になった為、海外の産業馬＝ペシュロン(フランスのノルマンディー産)やブルトン(同じくブルターニュ産)、ブラバント(ベルギー産)などの重種馬が輸入されて、日本の在来種との交配によって生まれた大型馬である。性格は温厚でおとなしく力持ち、脚が短く胴が太い

ペシュロン

ブルトン

ブラバンド

体型は、橇を引くのに最適だ。脚が短く見えるとは言え、体高は 180cm を超え(サラブレッド並み)、体重はサラブレッドが 400～500kg なのに対し、輓曳馬は 800～1200kg と倍以上も有り、如何に逞しい体つきの馬であるかが、想像頂けるだろう。

小学生の頃、夏冬の休みを過ごした祖父母の農場では、この大きな輓曳馬を三頭(牝馬)飼っていた。機械化が進む以前の農家では、何処でも農耕用に馬を飼養していたし、特に酪農農家では、搾乳や飼料の運搬に馬は必需品だった。その上、乳牛に比べて農耕馬にかかる手間は少なく、餌は乳牛には適さない繊維質の多い二番草で十分な事から、牧草地を有効に活用出来たし、乳牛に比べて取引価格が高く(1～2 歳馬は能力検査の後、直ちに競走用、農耕用、馬肉用にセリ分けられた)、現金化に早い等の利点で、殆どの酪農農家は祖父のように、数頭の繁殖牝馬を飼養する兼業農家となった。

繁殖用とは言え、普段は耕具を引いて農地を耕したり、収穫した作物や収乳缶を橇に載せて、国道沿いに在る農協の収回所まで運んだりと、この大きな馬達は農作業に無くてはならない存在だったから、祖父は起床するや先ず、馬の様子を見に厩へ向かう事を日課にしていた。朝飯に新鮮な牧草とデントコーン(飼料用の唐黍)を与えると馬の腸の働きが活発になるので、その後で汚れた寝藁を取り替え、農作業の合間には蹄鉄のチェックは勿論、体に丁寧にブラシをかけて常に清潔に保ち、冬は寒く無いようタップリと寝藁を与えて、それは其れは大切にしていた。

飼い葉桶からやっと顔が出るくらいのチビの私には、馬は見上げる程に巨大だったけれど、『身体が大きい動物ほど子供に優しい』の言葉通り、彼女達はキチンと顔を手の届くところまで降ろして、鼻面を撫でさせてくれた。良く動くビロードの様な唇と、澄んだ優しそうな目、時折ブシャンっとかけられる鼻水までもが大好きだった。そして、機会があれば橇にも載せて貰い、逞ましいお尻の筋肉に見惚れたものだった。

それから昔は、何処の家でも座敷の欄間に、礼服を着た御先祖様の遺影(白黒写真)を飾っていたが、祖父の家には更にもう一枚、立派な馬の背に乗った軍服姿の人の古い写真が有って、軽種馬(乗用馬/競走馬)の生産農家をしていた祖父の父親(私にとっては曽祖父)という事だった。明治の初期から『西洋の軍馬に見劣りしない馬を～』という軍部の要請で、日本の在来馬と輸入したサラブレッドを交配させて、背の高い見栄えのする乗用馬を日高地方で大量に産出しており、曽祖父もその一人であったそうだ。

明治の後期になるとこの馬達は勿論、重い砲台曳き用に多くの大型輓曳馬が、軍馬として満州に送られる事になった。馬を手放すに耐えられぬ農家の次男三男は、飼育係(歩兵として)に志願したり、曽祖父のように馬の調教師/乗馬訓練士として召集されたりして、多くが帰らぬ人となったとか(曽祖父は満州の地で結核を患って亡くなった)。戦後、徴用された馬達も戻って来なかったので、農村部ではかなり深刻な馬不足に悩まされた。食糧不足を補う為にも、先ず農耕馬の増産が急務となり、農村部に活力をつける“ばんえい競馬”が奨励されたのである。後に公営競技(地方競馬)として公認され、祖父のような兼業飼養農家や、専業の輓曳馬生産農家が誕生するに至っている。

さて、私の通っていた足寄町西小学校の校庭(運動場)は、夏の盆踊り大会を始め、北海道犬保存協会による犬の品評会や、秋の農耕祭では“ばんば競走”など、町の様々な催し物に使用されていた。北海道犬はアイヌ犬とも呼ばれる中型の、羆(ヒグマ)と蝦夷鹿(エゾシカ)の猟用犬だったから、狩猟が道楽の父がのめり込み、品評会では何時も一歳未満の“幼犬の部”で、引き手を命じられた(子供のハンドラーは当時珍しく、高得点を得られた為)。上位に入賞すれば地元の新聞に写真入りで掲載されて、それはそれで悪い気はしないけれど、繁殖家気取りの父の打算がモロに感じられ、私はあまり好きになれなかった。

実家で飼養していた故に、馬の賢さ大切さを実感して育った母は、只々純粋に馬好きだった。この母の影響を受けて、私も馬大好き(食べる方ではありませんぞ)。二人で時間が許せば、母は輓曳馬、私は

競争馬の絵を描いて批評し合ったり、紙切りの手始めも馬だったから、秋のばんば競走を待ち焦がれていたのは言うまでもない。学校が半日で終わる土曜日の昼前には、大量の土砂が校庭に運び込まれ、生徒が下校するや直ちに始まる競技コース造りを、想像するだけでワクワクした。日曜日の朝になって、競技の開催を告げるドンが町中に響くと、母と私はもう居ても立ってもいられ無くなり、朝食の後片付けすらもどかしく、手を取り合って小学校に向かったものだ。

民営のばんば競走/草ばんばでは、レース後の橇の移動を容易にする為に、コースがＵ字型に作られる事が多く、カーブ箇所に於ける橇の衝突や、他馬への進路妨害を防ぐために、騎手と馬の口を引く伴走者の２人で操る形が一般的だ。公営の競技場は直線で、各馬の走路を区切るロープが敷設されているので、騎手一人が橇に載って操作する。どちらもコースの途中に第一障害(高さ1m×長さ9.3m)と、第二障害(高さ1.6m×長さ16m)の台形上の山が設置される。勝敗は鼻先で決まる平地競走と違って、ばんえい競走はスタートもゴールも橇の最後端で決められる。これは荷物を運び切る荷役作業に由来している事と、馬が決勝線上で止まってしまう事がある為だ。

第二障害に挑む

重い橇と書いたが、果たしてどのくらいの重さを曳くのか？平地競走のハンディと同様、その馬の年齢や体重、経験(成績)などによって変動し、鉄製の橇と重りに、馬に装填する引き具、騎手の体重をも含めた総重量が、480kg～最高1000kgだそうだ(牝馬は牡馬に対して20kg軽減される)。

レースは重量毎に分けられ、大体2～5分で終了するが、砂塵が舞い上がる程に乾燥した真夏の走路では、橇の抵抗が大きい重馬場となって難航し、10分以上かかる事も有る。逆に天候が悪くなって、地面が湿り気を帯びた軽馬場は、競技の速度が早まり、雪の日で50秒という最短記録も有る。

競技に出場する大きな馬達は、近在の農家自慢の牡馬が中心で、勝った馬はその年の種付け(交配)料が跳ね上がるから皆んな真剣だった。馬達は西欧風に前髪や立て髪、尾などが綺麗に編み込まれ、鮮やかなリボンで飾られて、観客の目を楽しませてくれる(小さい子供は、馬の背に乗せて貰えた)。

スタート位置に並ぶ馬達は、気が早って前脚でしきりと砂をかく(公営競馬場ではここで、レース開始のファンファーレが鳴り響く)。号令と共に白い旗が振り下ろされると、全馬一斉にキャンターで飛び出し、観客の声援がドッと湧き上がる。第一障害は概ねこのスピードで難無く通過するが、次の障害までは時折足を止めながら近づいて行く(体力を保持しながら進む事で、“刻む”と言われる)。だが、Ｕ字型コースでは先行馬が、カーブの内側を優先的に進めるので、その辺の駆け引きも必要だ。

大きな第二障害の手前に来ると、どの馬も一旦止めて息を整えさせる。それから騎手は、手一杯に手綱を引き寄せて溜め、掛け声と共にパッと緩めてやり、馬は鼻面が自由になった反動を利用して、一気に障害を登り越えるのだ。騎手と馬が上手く呼吸を合わせられるか(二人操作では、伴走者と騎手の呼吸も)、如何に障害を越えるかで勝負の決まる事が多く、騎手間での仕掛けるタイミングの駆け引き等、レース戦略上で最も重要な所である。

馬にとってもこの第二障害は一番の正念場で、障害を越えられずに膝をつく馬、力尽きて倒れ込む馬などもおり、競技を棄権する多くは此処である。民営のレースでは殆どの騎手が飼い主、息子が伴走者を務めたから、難渋して膝をついてしまっても、そのままいざって障害を登ろうとする従順な馬もいて、そのいじらしさに、観客の感動を買うシーンが繰り広げられる。反面、負けん気が強く、追い越されてたまるか‼と、隣の馬に噛み付く果敢な馬もおり、失格となって失笑を買ったりもする。

第二障害を乗り越えた後のゴールまでは鞭が入り、騎手が意図的に馬を止める事は認められていないが、体力を使い果たして止まってしまう馬もいる為、ゴール直前での逆転劇もあって、勝負の行方は最後まで予断を許さない。この特殊な競技の形から、人が歩いても追いつく程度の速度でレースは展開する為、観客も馬と一緒に並走しながら観戦出来るのが特徴で、熱狂的なファンを生み出す要因となっている。

ゴールへの追い込み

娯楽の少なかったあの時代、観客は大声を張り上げて贔屓の馬を応援し、勝敗が決まる毎にやんやの拍手喝采。時には涙をこぼして一喜一憂し、日頃の鬱憤を晴らしていたものだろうか。第二障害の辺りに陣取った母と一緒に、この興奮の渦に巻き込まれていた私は、ばんば騎手にかなり憧れた。あんなに大きな馬を手綱一本(正確には二本)で操り、表彰台に登る時の晴れやかなこと、犬のハンドラーよりずっと輝かしいぞ～と思ったけれど、当時の騎手は農家の男性のみ。祖父の農場で実際に、輓曳馬に触れる事が出来るとは言え、ばんば騎手になりたい！とまでは考え付かなかった(ように思う)。

1947 年に、ばんえい競馬が公営競技として認められて以来、旭川、岩見沢、北見、帯広に競馬場が設立され、後に地方競馬全国協会の競走馬グランプリ賞に『ばんえい最優秀馬』部門が出来てからは、これらの競技場を巡回する形で、盛大に行われる様になった。しかし、1990 年代に入ると、過疎化の影響や他の娯楽に人気が移行するなどして、馬券の売り上げの減少による累積赤字が増え、遂に旭川、岩見沢、北見競馬場が、2006 年を目処に撤退する旨を表明。唯一残る帯広競馬場だけでの維持は、帯広市にかかる負担が大き過ぎるとして、一時は、ばんえい競馬の継続自体が危ぶまれたそうだが、ファンの嘆願や寄付の申し出に加え、ソフトバンク・プレイヤーズが支援を申し出た為に、帯広市営の単独開催が決まったそうだ。

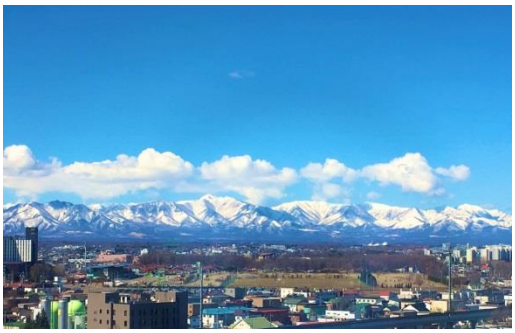
1994 年には、冬季の凍結を防ぐヒーティングと夏場のナイター設備が整い、通年開催も可能になったし、帯広市が主催する『ばんえい十勝』は北海道の馬文化の一つとして、北海道遺産にも選定された。そして、2005 年には映画『雪に願うこと』と、2012 年には NHK 札幌のドラマ『大地のファンファーレ』が放映されたので、観客の動員を促してくれている～と思う。

男性の混って戦う女性騎手

女性では成れないものと決め込んでいた騎手の方は、今はそのような制限は無いそうだ。生産農家の厩で、馬の世話をする事から入り、訓練の後に免許/認定試験を受ける。ここまでは平地競走の騎手と同等の扱いだけれど、大きな輓曳馬を操るには体重の勝った方が都合良く、上限が 77kg。レースも男女騎手混合で、77kg に満たない騎手に、弁当箱と呼ばれる重りの箱を積んで均等を計るのみだ。その上、立ったまま操作する橇には手綱以外に捕まるものが無く、手綱に頼って引いたりしたら馬が止まってしまうから、体全体でバランスを取らなければならず、その意味では腕力さえ鍛えれば、女性に有利な競技かも知れない。私はこのバランス(中学～高校時代は器械体操の平均台が得意だった)も、腕力にも自信があるし、体重の方も今や弁当箱無しでオッケーなくらい、騎手になれるじゃねぇ～かと思うが、いかんせんもう歳だ。

とは言え、ばんえい競馬の熱覚めやらず、帯広市に住む姉を訪ねる度に、競馬場にも足を運ぶ。

北海道旅行をする機会があって、お定まりの観光地巡りで飽き足らない方は(私はそういうのは可哀想で駄目だと言われる方は別として)、帯広競馬場に行かれる事をお勧めする。競技の開催は毎週末で、駅からも近い。競技は公式戦以外に、夏場には、騎手と一緒に子供が乗って競う“ちびっ子輓馬”や、女性騎手だけの“ポニー輓馬”といった変わったレースも有るし、10 月に催される、複数の人間がチームを組んで橇を曳く“人間ばんば”に至っては、厩に並ぶ馬達も笑い出しそうなくらい面白い。



帯広競馬場と日高の山並み

そしてお昼は、豚肉を照り焼きにして御飯に載せた、帯広名物の“豚丼”を食べ、デザートは濃厚なアイスクリームに、甘い茹で小豆をかけた“小倉アイス”が最高だ。帯広市振興協会の回し者になってしまった感も有るけれど、輓馬狂いに免じて御許しください。

ウィリアム・ワーズワース
壺 齋 散 人 訳

水　仙　（ The Daffodils ）

谷間をただよう雲のように
一人さまよい歩いていると
思いもかけずひと群れの
黄金に輝く水仙に出会った
湖のかたわら　木々の根元に
風に揺られて踊る花々

銀河に輝く星々のように
びっしりと並び咲いた花々は
入り江の淵に沿って咲き広がり
果てしもなく連なっていた
一万もの花々が　いっせいに首をもたげ
陽気に踊り騒いでいた

湖の波も劣らじと踊るが
花々はいっそう喜びに満ちている
こんな楽しい光景をみたら
誰でもうれしくならずにいられない
この飽きることのない眺めは
どんな富にもかえがたく映る

時折安楽椅子に腰を下ろし
物思いに耽っていると
脳裏にあのときの光景がよみがえる
孤独の中の至福の眺め
すると私の心は喜びに包まれ
花々とともに踊りだすのだ

無意識との道行き

佐山菫子

無意識とは意識を失ってひっくり返ることも意味するから、あまりいい感じの言葉ではない。しかし人間は意識と無意識とからなる全体性を持って存在しているのだとする分析心理学者がいる。スイスに 1875 年に生まれ、同じくスイスで 1961 年に死去した精神科医にして心理学者であるカール・グスタフ・ユングである。彼によれば夜、意識は死んでいるのではなく、背景に下がって働いている。それと同じように、昼間は無意識がないのではなく、背景に下がって働いているのだという。筆者はこのユング派分析家の資格を得、ロンドンで開業してから日本へ永住帰国した 5 年前を通じて 20 余年、この立場を体験し、また、セラピーにあたっている。以下、簡単に、この壮大な意識と無意識の道行きのほんの入り口を述べてみたいと思う。

ユングは 1907 年以降精神科医としての仕事のかたわら、フロイトの弟子として精神分析学会でリーダーシップをとることになった。華々しい活躍の中でフロイトを修正しながら尊敬を勝ち得ていった。しかし 1912 年フロイトがどうしても賛成しなかった『変容の象徴』という本を出版し、たった一人取り残されることに恐れを抱きつつも、フロイトからの決別を受け入れた。それから自分の経験に基づく新しい心理学を打ち立て、これを分析心理学と名づけた。フロイトが因果関係にこだわり、後ろを向いて、現在の問題は過去の体験から来ていると、決定論的原因究明に挺身するのに対し、むしろ前を向いて、今の諸問題からいったい何が起こってくるのだろうと現時点に足をつけつつ前方を見晴るかす。フロイトの因果論に対して共時性という、偶然のもたらす事態の意味深い展開に目をそそぐ。また概念に基づく認知機能のみならず、象徴性の意義深さを主張してやまない。

彼の心理学は中年を過ぎた成人に向けられている。なぜなら誕生時、まだ無意識の深いゆりかごの中にあった意識が、次第に目を覚まし、意識の中心である自我が上へ上へと無意識を後ろに蹴飛ばす形で成長する幼児・児童期を経て、人間は一応自我が確立した成人となる。しかし、自我は成長し、確立する過程で、無意識との関係を忘却し、あたかも、自分だけで生まれてきたかのように錯覚する。ここに無意識内の創造力と治癒力から切り離された中年以降の問題が生じてくる。世の中は日が昇るまでの過程においてはいろいろな指導があるが、日が頂点に達して沈み始める中年期以降については放置されていて、ここに注目する必要があるという観点である。

意識は上昇傾向を重視し、黒白を判別し、下降を失敗として避けようとし、義務を遂行することをよしとし、責任はとるべきであると判断する。いわばその判断が一方的で偏っているのである。清く正しく美しく生きようとする意識界の自我はそれが出来ないと自己嫌悪に陥る。自分を責め、他人を責めることになり、責めと恨みの悪循環が始まる。そんなときふとしたことでトンネルからぬけだせることがある。理由はよくわからないけれど、トンネルの向こうが見えてくるのである。もうだめだとしか思えないときに、夢の中でふと、狐が道案内をしてくれたり、馬が空を飛んで助けにきてくれたり、だれかが傘をさしかけて歩いてくれたりする。蛇だってなかなかな教訓を与えてくれることもある。これが共時性、即ち原因結果の結びつきではない、「偶然の、意味ある結びつき」といわれるものである。夢解釈は分析心理学でよく用いられる。

さて、無意識を離れて大きく成長した意識は、自我を中心としてこの世に適応し、成功裡に生きようとする。当たり前の傾向である。そのとき、人はあるがままを見せることは好都合ではないことに気づき、この世で評価されるマスク・仮面を身に着けることになる。善意からの努力である。これをユング心理学ではペルソナと呼ぶ。このペルソナは世間に対して見せる好ましい私、あるべき私であるばかりではなく、自分でもこれが自分だと思い込んで安心できる仮面である。すると本来のあるがままのわたしに何が起こるか。私の一部が、知ってか知らずか暗闇に追い込まれることになる。本来自分のものであるありのままの自分の一部が暗闇にかくされることになるのである。これはシャドウ、影と呼ばれる。ペルソナの相棒である。これに気がつかないでいると、思わぬところで、足を取

られる。この影の 9 部分には否定的なものも、肯定的なものもあるが、この影を取り入れることが、分析家との心理分析の過程のまずは大切なステップとなる。この影はありがたいことに夢の中で、夢みる人と同性の人物として、また同性の友人としてあらわれることが多いから、彼らを描写するところから自分の影の部分を学ぶことが出来る。いいにしろ、悪いにしろ自分の一部としては思い付きもしないことを、かつての友人の特徴としては描写することができるのである。それが実は彼らのことではなく自分自身のことであるということを受け入れることが、無意識との道行の第一歩となる。自分のゆりかごである無意識との関わりを夢を通して取り戻すのである。しかし、無意識は他方、知らずにいると数限りない落とし穴をほる。神話やおとぎ話を読むことで無意識の数限りないイメージを知ることが必要だ。そこには自分の中に潜む、人類が始まって以来の長い歴史と人間の営みが描かれている。白も黒も同時に自分の中にあること、山があれば谷があり、なだらかな海があれば荒波も押し寄せる。その両方を人間として雄々しく生ききることを無意識との道行きとまずは呼びたいと思う。

ああ、人生

石山望

この頃、思うことがある。

でも、それは、私くらいの年齢の人達にとっては、同じことかもしれない。
そして、それが、「分る」ということなのではないのか。
よく思う。ことに、逝き去りし、今は亡き人達のことである。

私 7 歳の時、父が亡くなった。享年 57 歳。
それまで、父が商売（京都中央市場の塩干仲買）をしていて、我が家を支えていてくれたので、これはすぐに後継をというわけで、私の２番目の姉に白羽の矢が立った。彼女 23 歳。

彼女には 4 つ違いの兄がいたが、これがまた、全く商売には向いていなかった人で、早々と家を出て、大阪の裁判所に勤めていた。

でも、この２番目の姉、一人では商売を継げないから、誰か婿養子をというわけで、急遽、血のつながらない親戚の人と結婚した。
しかし、この人、いわゆる「いい人」であったが、金勘定もできない。姉は、嫌だったそうだが、「この人と結婚しなかったら、家が潰れると思った」と、後年私に話してくれた。まあ、家の犠牲になったというわけである。

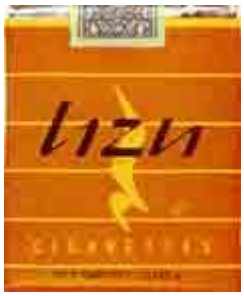
その婿養子に来られた人は、商売が下手、金勘定もできない。また、周りの者の決めた結婚で、自分の嫁との仲がそんなにいいということがなかった。というわけで、我が家の雰囲気は、なんだか冷たく、ギスギス、。
この養子さん、丹波の大きな農家の 3 男坊で、非常に呑気。したがって、姉は商売の全てを自分で仕切らなくてはならなくなってしまった。
子供は、男一人、女２人。ただ、その誰ともあまり親近感はなかったように思う。

当時、私の母親がまだ生きていたので、私もその実家にいたが、その養子さん、極めて保守的。韓国人のことを声高に「チョーセン！」と呼ぶような人で、私、それが厭だった。一人息子に嫁が来た時も、嫁は、あからさまに、自分の義父に軽蔑の眼を向けた。
そんなこんなで、彼は、まず完全に家の中で浮き上がってしまっていた。
商売の方は、なんとか姉が頑張って、切り盛りしたが、彼女夫婦のなめた辛酸は、それはそれは筆舌に尽くしがたいものがあったと思う。

私、今にして、この義兄のことを思う。なんと立派な人であったかと。
冷たい家の中で完全に孤立。これといって友達もなかったのではなかろうか。
しかし、それでも、離婚して口うるさい田舎に帰るわけにもいかず、我慢に我慢を重ねて、我が家にいてくださった。これは立派である。
だって、この人が来て下さられなければ、我が家は潰れていたに違いないのであるから。
私、彼の存命中に、そういうことを理解して、彼と親しくしようという努力をしていれば、どれほどこの義兄、救われたかもしれない。

ただ、その頃は、私、自分自身に問題があり、そこまで膨よかな気持ちになれなかったのも事実である。
それどころか、口汚く罵ったこともある。
本当にゴメンね、兄さん。
（人間、この世を去った人に謝るのは、生身の人間に謝るより、はるかに楽である。やはり、まだ生きておられるときに、面と向かって謝らなくては、）

その義理の兄さん、最後には、好きなタバコ（彼の唯一の友達、「いこい」というきつくて安いタバコ）を吸い続けて、71 歳の若さで死んでしまった。脳梗塞。



私、これは十分理解できる。周りに誰も親しい人がいない状態で、生きているのが嫌だったのであろう。ましてや、自分の妻に先立たれるなんて以ての外。いわば、間接的自殺である。
この兄さん、お酒でも飲まれれば、私も、もう少し話しやすかったのであるが、それもなかったし。
そして、姉もまた、後を追うようにして、その数年後亡くなった。今度は、脳溢血で、。

人間は、死ぬと、誰でも仏になるというのは、本当である。
ああ、こういうことが理解できるようになるのには、自分自身の生活がやっと安定するようになり、心に余裕ができ、人の痛みも分るこの歳まで待たなければならないのですか。
するとそのあとは、「自分の旅立ち」の為の準備にとりかからなければならないのですね。

ああ、人生、、

忖　度

この言葉に初めて接したのは、高校入試模擬テスト国語の問題でその読みを問われた時である。私 14 歳。
私にとっては、それまでお目にかかったことのない言葉であったから、もちろん読めはしない。模範解答を見て初めてわかった次第。
しかし、それを今でも、このように鮮明に覚えているのは、まあ、なんと美しい言葉であろうかと思ったからである。

「ソンタク」という言葉の持つ響きもさることながら、その意味合いもまた、非常に美しいものだと、半ば勝手に解釈してしまった。

意味は「人の心を推し量ること」である。しかし、その模擬試験以来、私は、この美しい言葉に、「静かに推し量る」とか、「おもんばかる」とか、概ねいい意味合いを持たせた。
「自分のことよりも、ひたすら相手の人のことを鑑みて、」という、非常に床しい言葉。
でも、それは、私が、「身目麗しい人は、心も麗しいに違いない」と、勝手に決めつけてしまった結果かもしれない。

いや、おそらく、そうであろう。

しかし、幸い、私はこの美人に実に永らくお目にかからなかったものであるから、わたしにとっては、彼女、あくまで幻の麗人。
と、思いきや、思いきや、。

ご存知の通り、昨今の体たらく。非常に次元の低いところで、この美しい言葉が濫用され始めてしまった。
濫用は、往往にして変容を呼ぶ。ある事柄が、余りに人口に膾炙されてしまうと、そのことの本質が曲解されがちである、ということである。
したがって、この頃では、この美しい言葉を目にするたび、目を反らしたくなる。
今時の使い方では、「忖度」の意味が、精々いいところ「推し量る」、「推測する」、「憶測する」（じゃ、なぜ、「忖度」などという雅味のある言葉をあえて使うのか）。

しかし、多くの場合、「自分にとって都合のいいように、解釈する」という意味で使われているとしか思えない。それが最も大きな問題である。

「言葉は生き物」というから、ある言葉の持つ本来の意味が、このようにして様変りするのは、ある程度、仕方のないことであるとは思う。
ただ、そういうことが、一般世間で、時間をかけて徐々に、徐々に起ったというのなら、まだしも納得がいく。
それが、今度の場合のように、ある（知名度の高い）一握りの人たちによって、成し遂げられてしまったというのが、「忖度」ファンの私としては、何とも忌々しいところである。

加えて、もう一つ。

こういうことが起こるたびに感ずる、新聞始め各種メデイアの「体たらく」である。
社会の一般愚衆が、常軌を逸した行動に出た場合、それの軌道修正をするというのが、その本来の使命ではないのか。
それが、あろうことか、愚衆に阿っているというのであるから、嘆かわしい限り。

ああ、「忖度」様。どうぞご心配なく。
貴女様も、そのうち、心ない輩どもから小突き回されるなどということは、無くなりますよ。
少なくとも、私だけは、本当の貴女を存じております。貴女には、幻でもいいから、「永遠の麗人」でいてほしい。

英国春秋歌壇

バロー典子

芽ぶきの緑

嬉しさは　令和の御代の　即位時に
　　虹立つ空を　はるか見しこと

枯葉落とし　毛細管の　ような枝
　　天に拡げて　冬待つ大樹

カラフルに　落ち葉舞い立つ　アスファルト
　　はしゃいで走る　孫を追うわれ

音もなく　落ち葉敷き敷き　地を覆い
　　春に生まるる　ものを守れる

座禅する　我に寄り添う　2歳児の
　　真似とは言えど　無言のひと時

補修終え　化粧直しを　したような
　　まぶし気顔の　ビッグベン見ゆ

雪剥りて　小さな鈴の　花つける
　　スノードロップス　命のちから

街灯に　照らされ見えし　裸木の
　　小枝の先に　芽ぶきの緑

老いゆくも　孫育つ日と　重なりて
　　感謝深まる　日々にてあらむ

英国春秋俳壇

エリオットつや子

ヒヤシンス

秋めいて人と会うこと多くなり

蔦もみじ幹くねるままかけ登り

陽だまりの猫ヒゲたたみ耳眠る

元旦の街は午後から人あふれ

羽子板の押し絵美人の白い指

雨多き冬に決行脱ユーロー

窓ぎわの蕾ほどけるヒヤシンス

ヒヤシンス花の喜び香に託し

春浅き暮色うつろう水たまり

ひな祭り何はともあれ小豆煮る

英国と日本　それぞれの医療事情

小谷　信行

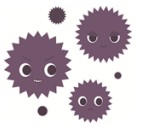
JGMC 前院長の小谷です。３年間の英国生活を終えて、今年の１月１９日羽田空港着のブリティシュ・エアウエイズで本帰国しました。在任中は多くの方々に、特に日本人会の皆様には、大変お世話になりました。とても溌剌としたメンバーの多い「紅葉会」では２回も講演をさせていただき、「現代の子育て事情」、そして「人生１００年時代のライフステージの変化」などについて、活発に、楽しいご意見を交わす事ができました。とても満足し、皆様に感謝の思いでいっぱいです。

JGMC では英国の医療の最前線を経験させていただきました。GP とスペシャリスト、NHS とプライベートなどのイギリスの医療制度の長所、短所をたっぷりと味わった気がします。

日本で４０年以上小児科医として、医師会や学会の幹部として生活してきた私にとり、日本とあまりにも違う医療制度に驚きました。その驚いたことはたくさんあるのですが、ここでは、７つだけあげてみたいと思います。

１）　<u>イギリスはゆっくり診察</u>　一人２０分から３０分の診察はとても新鮮でした。日本では５分、長くて１０分でした。早口に喋り、患者さんを質問攻めにし、検査に回し、診断をとにかく告げて、薬をたくさん出す、これが常識ですが、ロンドンは違いました。ロンドンの当局（CQC）の方針もあり、よく話を聞く、深いインフォームドコンセント、効果的経済的な医療、抗生剤ははっきりした理由なしには出さないなどがイギリスの医療だと知りました。これに切り替えることにより、私も、とても豊かな気持ちで患者さんと同じ方向を向いて診療ができたと思っています。

２）　<u>イギリスではマスクはしない、手袋はする</u>　日本に本帰国した途端、新型コロナウイルスの流行が始まり、日本ではほとんどの人が、マスクをしています。予防効果の面では効果があるというエビデンスはないのですが、右にならえ好きの日本ではマスクの争奪戦まがいの品不足です。もちろん私はしていませんが、３月から勤め始めた病院では、私以外の全スタッフ、患者さんはマスク着用していて、私から見ると異様な光景が展開されています。イギリスでは、マスクをしているのはほぼ日本人で、それ以外、あまりマスク姿は見かけなかった気がします。その代わりではないですが、診察や注射などの処置の時はディスポの手袋を必ずします。日本ではほとんど手袋はしません。医療スタッフの手袋着用が、自身も患者さんも感染防御の面では重要と考えられています。私も習慣化していて、帰国後も同じように手袋を着用しています。



３）　<u>イギリスでの予防接種は筋肉注射</u>　日本ではほとんどの予防接種を皮下注射でやっていました。つまり、医師は皮膚を持ち上げて皮膚の下、筋肉の上に針を入れ、ワクチン液を投与します。皮膚表面から浅いところに入れるので、皮膚が腫れたり、赤くなったりします。イギリスはじめ、ほとんどの国は筋肉注射です。この方が痛くないし、副作用も少なく効果的です。最初はとても戸惑っていましたが、すっかり慣れ、日本に帰った今、つい皮下注射ではなく筋肉注射をしようとして、ハッとする始末です。

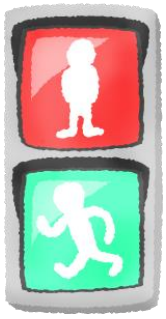
４）　<u>イギリスは粉薬がない</u>　日本では粉薬を２種類も３種類も混ぜて処方していました。同じようにしようとすると、イギリスでは粉薬がないのです。錠剤かシロップです。しかも混ぜることは原則禁止されています。とても不思議でした。でもよく考えると、粉を飲むという行為自体、とても不自然で、誤嚥しやすい飲み方です。日常生活での食べ方を考えると、小さな塊として嚥下するか、スープ状の液体を飲むかに分かれ、粉状の食品は直接食べることはありません。日本始め東洋の人々は粉

の薬を水とともに飲む文化を作り上げてきたのだと気付きました。ないものは仕方がありません。子どもたちはシロップ剤を中心に処方を受けることになります。飛行機で旅行する時は機内に持ち込めるように、１００ml の小瓶に分けて、処方することにしていました。

5）　イギリスでは子どもと親は一緒に寝ない　知り合いの英国人に話を聞くと夫婦と子どもさんが同じ部屋でいわゆる「川の字」に寝ることはまずないようです。知り合いの英国人数人に、日本では仲良く親子で同じ部屋で寝ると話すと、判で押したように「家が狭くて、部屋がないんだろう」と皮肉とも同情とも取れない答えが返ってきました。子どもと常に一緒にいて慈しみ育てる日本の子育て文化は想像できないようです。ちょうど１年前に隣のフラットに男の子の赤ちゃんが生まれ、お祝いに行くと生後１週間ですでに少年のような服を着させられていて、しかも彼用の靴までお母さんが見せてくれました。初めからジェントルマンとして、距離をとって育てる文化を感じました。もちろん別室で寝かされていて、スマホのモニター付きで、泣けば、別室からお母さんが授乳に来てくれるようです。泣いてもすぐには対応でいないので、多分むやみに泣かない子どもはできるかなと思いました。

6）　イギリスでは誇り高き高齢者が多い　同じフラットの一階下に９６歳のジェントルマンが住んでいました。妻がリフトに乗り合わせたことをきっかけに、知り合いになり、お互いのフラットで夫婦一緒に食事やアフタヌーンティを定期的にする関係になりました。彼の家族や友達も同席することも多く、日本のことやお互いの文化のことなどで話が弾みました。「義理と人情」に縛られない国の良さをつくづく感じました。体や視力、聴力は少し衰えがあっても、思考力や決断力はすぐれていて、しっかり一人暮らしをしています。車も運転しています。年齢で制限するエイジハラスメントはなく、誇りを持って生活していることがよくわかりました。彼の娘さんや息子さんも世話を焼きすぎず、とてもいい距離感で親子関係が築かれていることを知りました。これはイギリスの伝統文化の中で、当たり前として行われていることだと思われます。日本では、高齢者はひとくくりにされ、なんでも世話をされ、本人のやることをなされ、さらには施設に入れられ、自己決定の場面が減り、認知症傾向が強くなるケースも少なからずあることを聞くと、ある面イギリスの高齢者の文化は、良い意味でのおどろきでした。

7）　イギリスでは赤信号を一人でも渡る　一時期「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というフレーズが流行りましたが、これは日本のみだったようです。イギリスでは自己責任？で、赤でも安全確認をして、信号を渡る場合が多く見られます。今回の帰国後日本で、赤信号でつい渡ると誰もついて来ず、バツの悪い思いをしてしまいました。それからは田舎の全く車がいない道でも、青になるのを待っています。これが日本だと言い聞かせながら、もう少しイギリスっぽくてもいいかなと思います。でも新型コロナでは小中高校が長期休校になりましたが、昼間、子どもたちは誰も外に出ていません。きちんと集団にならないよう、感染が広がらないようにしているようです。おかげで私たち夫婦も孫を時々預かる羽目になって、嬉しいような、しんどいような気持ちです。



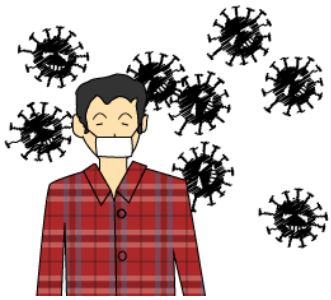
以上とりとめもなく書きましたが、３年間のロンドンで医師として、CEO として、異文化の中で生活できたことは、私のアイデンティティを変え、今後１００歳までの３０年間の生き方を変えたと思っています。

　イギリスの素晴らしい日本人コミュニティと、その中心とも言える英国日本人会のますますのご発展と皆様のご健勝を日本の地からお祈りいたします。

誰もがメディアになれる時代

渡邉伸悟

この原稿を書いている今、世界はコロナウイルスの拡散によるニュースで持ち切りだ。イギリスも日増しに感染に関するニュースが増え、ついには亡くなった方も出てきてしまった。Facebook の関連投稿も増えているし、友人知人との話もやはりこの話題が中心になっている。会計という仕事上この時期には顧客訪問も多く、人と接したり移動する時間もかなり多いのだが、3 月になってから顧客面談は不要不急なものの場合は電話会議・ビデオ会議とすることになった。また、ほぼすべての訪問先でレセプションでの消毒液の使用が求められるようになった。プライベートで予定していた月例の勉強会なども念のために見送りを行い、限られた知人・友人と自宅で会う以外は移動や外出も控えている。輸送手段の進化とビジネスのグローバル化が深く進んでいる現在において、ヒト・モノ・カネの移動はかつてないほど多く・早く・複雑になっている。そんなことが言われるようになって久しいが、コロナウイルスの爆発的拡散とその影響は、そのことを世界の多くの人に改めて実感させる出来事だと思う。



初めてコロナウイルスのニュースを見たとき、それは中国を中心にアジアで広がるものでありテレビの中のニュースという印象だった。もちろん日本に住む家族のことは気がかりで連絡は取りあっていたが、「マスクの転売」や「トイレットペーパーの買い占め」などのニュースも正直なところ気に留めるようなことではなかった。私が本業としている会計業界では、当初コロナウイルスについては財務諸表への影響がどの程度かという話題が大半だった。例えば中国で製造ラインをもつ企業の製造スケジュールに影響が出て、供給量が減りビジネスに損失が出るかもしれず、その場合損失額をどのように見積もり財務諸表に反映させるべきかという話。イタリアに子会社がある企業の取締役やドバイ在住の取締役など世界中で重役についている人の移動が制限された結果、ミーティングのスケジュールを大幅に調整せざるを得なくなったという話などだ。私にとってコロナウイルスの話は仕事上の懸念事項としての関心がほとんどだったと思う。しかしながら、イタリアやスイスなどヨーロッパでの感染が確認され、イギリスでもニュースがどんどん増えていき、街中からハンドサニタイザーが消え、一部のスーパーマーケットがトイレットペーパーなどの配給（rationing）を始めた今、自分自身がどうすべきかということを（遅まきながら）やっと考え始めた。

日本語と英語のニュースをこまめにチェックし、日本大使館やロンドン医療センターからのメール、UK 政府の公式サイトなどを見ながら情報を集めていて、執筆時点では基本的には「手洗い・うがい」の予防的行動と人込みは避けるなど行動に注意すること以外に特別な対応方法は必要ないということがわかってきた。ところが Facebook や Twitter などいわゆるソーシャルメディア（SNS）で拡散されている情報の中には、根拠が示されていないデマのような情報が多くあり驚いた。以下、有名なもの（すでにデマもしくは一般的な効能以上にコロナウイルスに効くわけではないと報告されているもの）を上げてみる。

- 免疫機能の向上に御影石から出る放射線が効く
- 白湯を飲めば予防できる
- トイレットペーパーはマスクと同じ原料なのでマスクの代替品になる
- 日向で干したマスクなら再利用可能
- ニンニクを食べる

- Miracle Mineral を飲む

これらの情報は、「〇〇病院の医師の言葉」や「医療関係者推奨」という情報と共に数千・数万のシェアが繰り返され幾何級数的に広がっていった。実際、私の Facebook の投稿を見ても「コロナウイルスの陰謀説」や「白湯を飲むこと」、「(特定の）マスクを買えば確実に予防できる」など、辿っても一時情報の根拠が見つからない情報をシェアしている投稿もあった。

ソーシャルメディアの発展とともに人々の消費行動は「AIDMA」から「AISAS」へと変わっていたとされる。AIDMA とは Attention, Interest, Desire, Memory, Action の略であり、それは「テレビや雑誌などで消費者の**注意**を引き、**興味**を持たせ、購買したいという**欲求**を生み出す。繰り返しその情報を人々に提供することで消費者はそれを**記憶**し、最終的に購買という**行動**へ移る」と定義されている。しかしながら現在この消費行動は AISAS になっているといわれる。AISAS とは Attention, Interest, Search, Action, Share の略である。興味を持たせるまでは従来の消費行動と変わらないがその後「消費者は**検索**し、**行動**し、その情報を**共有**する」のだ。従って企業側はどうやって検索してもらうか、そして買った後にさらに共有してもらうにはどうすればいいかまで考えてマーケティング活動を行う。つまり消費者さえも媒介者として、次の消費者の消費行動を喚起する一部として機能しているのだ。加えて先進国ではモノの供給が必要十分を超えた結果、機能性や価格といった従来重要だとされていた条件よりも「誰が使ったか（有名俳優も使っている！)」やストーリー性があり共感を呼べる商品を人々が求めるようになっている。影響力のあるユーチューバーや V チューバー、インスタグラムや TikTok などでフォロワー（支持者）が多い個人などが「インフルエンサー」と呼ばれるようになり、企業から広告料を受け取り商品を使用することでフォロワーがそれを購入するという流れがもはや当たり前になっている。私の友人もロンドンでレストランを探すときには Timeout やネットでの検索ではなく、Instagram に投稿され「#Steak」などとタグ付けされた写真を検索したり、自分がフォローしているインフルエンサーが投稿したレストランに行っていると言っていた。今や、一個人がテレビや雑誌と同等もしくはそれ以上の力で消費行動に影響が与えられる時代になっている。言い換えればそれは「誰もがメディアになれる時代」だということだ。

コロナウイルスの感染者数の増加や驚異的な速度での世界への広がりは、グローバル化した時代がもたらしたものであることは論を待たない。しかし、コロナウイルスの拡散に付随して起きている買い占めやデマなどの世界的なパニックは「メディア化」した人間がもたらしたという側面も多分にあるのだろうと思う。もちろんメディア化している個々の人間にはその意識はない。自分がフォローしている Twitter などのソーシャルメディアは無条件で信頼しているだろうから、そこから情報がくれば「善意で」シェアしてしまうのは仕方がない。今の時代、情報そのものが拡散・共有されることを目的としてデザインされている以上、この傾向は続くのだろうと思う。不謹慎かもしれないが、私にはそれが皆が「情報」というウイルスに感染しているように見えてしまう。「誰もがメディアになれる時代」、それはすべての人々が情報の媒介者となる可能性を秘めており、相互に影響しあい信じられないスピードで情報が拡散していく時代だ。今回のコロナウイルスの拡散について、もちろん早期終息を願ってやまないが、それと同時に今回「情報」がもたらした多くの影響についても検証を行い、人々が自らをデマ情報などの媒介者にしないような対策を考える必要があるのではないだろうか。

鳩　　（　その３　）

ウイリアムズ百子

久しぶりに遠い義姉のことを思い出しこの 9 月に生まれるという赤ん坊のことを無感動に思い起こしていた。あれ以来、僕は女というものを愛さなかったし、愛せなくなっていた。その僕が昨日会った彼女の事で幾らかやるせなさを感じているのであった。自分ではこの感情が何であるのかわからなかった。

僕は寝巻のまま窓を開け水滴を一杯含んだ湿っぽい空気を鼻の奥の方まで吸い込んだ。11 時頃学校に着くとすぐにケンに会った。二人共何かあることについて口に出すことを恥じているかのように黙っていた。口を開ければ、それが出そうであった。3 時間目の授業が済むと二人はサロメに行った。二人の感は的中しアサヨがそこに一人でいた。店の一番奥まった隅のイスに背を向けて座っている。僕達はつかつかと歩み寄り、前の空いている席にドッカリ腰を下ろした。アサヨは今まで目を閉じていたらしく、うっすらと目を開けると二人を見た。

3 人はあまり多く話さなかったが、それでも 4 時頃まで一緒に座っている間に、お互いの気持ちが和み、しみじみとしたものが 3 人の間に、ひたひたと押し寄せてくるのを感じた。その時から僕たちは親しくなった。僕達は口にしてこそ言わなかったが、3 人の中の特定の 2 人だけがある種類の愛情をもちあうことをタブーにしていた。それが 3 人の友情関係を維持する唯一の方法であったからだ。

ある 5 月の始めの暖かい日　－　それは 2 年になった年のことであった。　偶然、僕はサロメでアサヨに出会った。　その日彼女は珍しく多弁であった。自分がある教授に特別の感情を抱いているという意味のことを無表情にしゃべった。その教授というのは、およそ自分の趣味に合うような男性ではないし、彼には妻子があるということも十分解っている。だけど、白髪の少し混じった髪や、彼の周りに漂っている、一種の寂しさと云えるような愁いに、自分が教授の空白を満たしてやり、そのガッチリとした胸に自分を投げ出したいという感情になった。そしていつの間にか、その教授の授業を心待ちしている自分に気が付いた。自分は今からどう行動して良いものか皆目見当もつかない。かと言って、所詮始めから結果はわかりきっている。それに教授が果たしてどの位自分のことを思っているか疑わしいし、自分は美人でもないから最初から教授の目にとまってすらいないだろうと自嘲的に言い放った。

僕はアサヨを今まで一度だって醜いと思ったことがない。いや、それどころか、彼女の独特な魅力に参っているかもしれなかった。　彼女はその後、涙でうるんだような声で、小さく何か言っていたが、すぐに元の様なきつい、はっきりした口調で、自分は常に何かに生命（いのち）を燃やしていないと生きていけない性分で、それが他の人にとっては、再び立ち上がれないほどの酷い仕打ちであっても、自分は又這い出るだけの力があるんだということを言った。そんな話をした後で、僕に、あんな烈い（つよい）詩を書くようになったのには何かがあったんじゃないか、自分にはそう思われるのだが、とじっと僕を見つめた。僕はちょっとたじろぎ、曖昧な返事をした。それは「そうだ」とも「そうではない」ともとれるようなものであった。

彼女は図星だろうと言わんばかりの顔をしてちょっと笑った。アサヨが笑うと目尻に皺がよった。僕が別人のようで可愛らしいというと、アサヨは急に笑うのを止め、自分はこの目尻の皺が何とも年寄り臭くて嫌なので、なるべく笑わないようにしているのだと真剣な顔をして云った。僕にはそのアサヨがなお一層いとしく思われ、まるで幼い子供のように目に映った。

3 人が話したり、詩を批評しはり、映画に行ったり、試験勉強を助け合ったりして一年がたっていた。僕は相変わらず彼女への感情を押し殺したままでいた。ケンのアサヨに対する気持ちがどんなものであるか解らなかったが、ともかくも表面だけでは、友情以上のものは何も感じられなかった。ケンはアサヨの詩に「潤い」が無いと批評し、彼女はそれは自分の地であるから仕方がないではないかとやり返していた。

何時の頃からであったか彼女はタバコを吸うようになっていた。一等最初、タバコを口にした時、息を吸い込むのと同時に煙を飲み込みひどく咳込み、顔を真っ赤にしたが、2 本目からはまるで随分前から吸っていたみたいに悠々と煙を吐きながら吸った。ケンと僕は、始めの様子はテクニックであって本当は前から吸っていたんではないか等と疑ってみたりしたが、今更僕達の前でカマトトぶる必要もないことだし、やっぱり始めてだったのかなとも思ったりした。彼女は不思議な女の子であった。

そして、今、アサヨを見つめながら僕は先刻から同じ質問を心の中で繰り返していた。だが、一年という間、友達関係を続けてきた僕が今になってアサヨを愛しているなどと言える筈もなく、安心して僕を頼っている彼女への裏切り行為のようなことはしたくもなかった。

2 年目の夏休みを間近に控えて、3 人は特に繁く、サロメで会った。夫々好き勝手な事をしながら、3 人がお互い近くに居ることを常に意識しておくためであった。ケンはモダン・ジャズを聴き　ー　たいていがそうであったが　ー　アサヨは本を読んだり、時にはじっとタバコをくゆらせながら何処ともなく見つめ何か考え込んでいたり、僕と言えば詩を読んだりシェークスピアの物など声を出して朗読してみたりした。　又時には 3 人で一つのテーマーについて議論したりした。

僕は今では疑いなく彼女を愛していた。彼女が僕のこの様な感情に気づいていたとは思えない。それは義姉への息苦しく、熱っぽい感情とは違って、割と落ち着いていられるものであった。彼女はこの一年の間に幾つかの恋をした。そしてその度にきまってそれを捨てて僕のもとに帰ってきた。求めて得られなかった真の愛は彼女の心を傷つけ、それを僕の胸の中で癒した。傷が治ると直ぐに、僕の胸元から別の男のところへ飛び立っていった。　そして又、破れた羽で疲れ果てた体を一生懸命支えて、僕の中へ舞い戻ってきた。今度こそは自分の真の姿を愛してくれる愛だと確信したものが、今までと変わりない男の戯れに過ぎないと悟ると彼女はそれ以上、その男を許せなかった。僕は人から笑われようが、それを辛抱強く癒してあげる位の大きな愛情を持っていた。僕にはアサヨという女を完全に理解している唯一の男だという自惚れがあった。必ず僕の下に帰ってくるという自信もあった。彼女にもそれが漠然とではあるが解っていたらしく、決まって僕の胸元にすり寄るように帰ってきた。僕はこの前言っていた教授への感情がどんなになったか知らない。アサヨはそれ以後、そのことについて何も話さない。その間に我々の「蜘蛛の巣」は次々と発行されていった。

2 ヶ月の夏休みが終わり 2 学期の始め、久しぶりに会ったアサヨは幾分前学期と変わっていた。あの黒い髪は肩まで伸び、太陽の陽で焼いた肌は小麦色に光り、短いブラウスの袖から伸びた腕は前よりかいくらか肉付きが良くなっていた。だが、相変わらず、キラリとよく光る焦点の無い瞳がそこにあった。

ジーパンに縞のシャツを着たケンも人が変わったように明るくなっていた。僕だけが取り残されたように若さを失っていた。

夏休みが始まると気が進まなかったが去年の夏帰省しなかったので父と兄の勧めに従って田舎に帰った。僕はそこで母親になった義姉と新しい生命を持ったものを見た。

義姉は母親になることで「女」であることから解き放され、ゆったりとして妻の座に座っていた。その顔は妻という位置に安心しきり、夫と子供のことで自己を忘れてしまった 1 個の母の顔であった。

少し痩せたようでもあったが、ふくよかな両の円い乳房を姪の小さな口に含ませている姿は僕に涙を滲ませた。新しい生命は黒い瞳をじっと母親の方に向けて無心に飲み続ける。義姉は俯いていた顔を上げると黙って見ている僕の方へ目を向けニッコリとそして、ちょっと恥じらって微笑んだ。僕は涙で潤んだ目をして彼女を見つめ笑った。

1 年半という期間は僕を大人にし、愛する女（ひと）を神聖な母親という生物に変えていた。

あの時の焼けつくような、息苦しい恋心は何であったのだろうか。もしかしたら、あれは夢であったのではなかろうか。。。。。ここは余りにも静かな、幸せに満ちた家庭であった。僕は自分の位置をその中に見出すことは出来なかった。浜辺で釣りをしたり、近くの山に登ったり、詩を書いたり、本を読んだりして毎日を過ごした。彼女やケンからは時々手紙や葉書が舞い込んできた。すると僕は東京に居る二人の事が気がかり、直ぐにも上京したくなった。僕はいら立ちと何となくいたたまれぬ我が家の空気の中にあって、増々痩せ、神経質になっていった。

休みが終わり、東京駅に帰って来た時、暑い人いきれの中で僕は身内を貫く何かを感じた。生暖かい温もりをもった、血の塊のようなもの、或いは、黄色い僕の中のネバネバした体液の凝固したようなものが再び僕の中で流動状態に溶けるような感じであった。そして僕は、それでやっと義姉の「女」から放たれたことを悟った。僕の中の二つの「女」はこの休みの間に激しい闘いをした。その間にあって僕自身は小さく黙り込み、目をつぶり続けていた。そして、この瞬間、彼女の勝利が決まった。僕は出口に流れている雑踏の中で小さな叫び声を上げた。それは喜びともつかぬ、遠い昔への惜別ともつかぬ、そして新しい僕の出発の掛声ともつかぬ叫びであった。

夏休みの後、2 週間が過ぎると前期テストが始まった。それと同時に僕はケンとアサヨとの間に今迄と違った雰囲気を嗅ぎ取った。3 人一緒にいても、時々、ふと二人の間に僕が入っていけない壁のようなものに気が付いた。始め僕はそのことについて、それほど気にしなかった。二人が夏休み前より幾分親密さを増したとてそれが直ぐに恋愛感情と結びつくものではないと思っていた。だが或る日、同人の一人から、二人の仲が既に友人以上に進んでいるということを聞いてから、僕は病的に鋭く二人を観察し始めた。

ケンと彼女の肌が同じ程度に日焼けしているのも、何かを案じしているかのように思われた。ケンの明るい響きをもった笑い声も夏のなごりを残しているようであったし、彼女の全身に円みを帯びた身体（からだ）も僕の目障りになった。だが、僕がそのことに気づいているという態度を二人の前で微塵も見せなかった。彼等もそうなってしまった自分達のことを僕に悪いと思っているらしかった。その思いやりというか、同情のようなものが僕にはかえってやりきれなく、僕と二人の間に冷たい風が寒々と吹きぬけるのを感じさせた。

あの時、駅の雑踏の中で僕の中にはっきりと領域を占めた彼女の面影は、そうした中で惨めにも少しづつ萎んでいった。僕は悶え、苦しみの中でムチを打ち、喘ぎながら詩を生み出した。それは、あたかも蜘蛛が口から絶え間なく糸を吐くのに似ていた。僕は苦しみの中からかって幾度がそうであったように、今度も僕の元に帰ってくれると言う願いにかけた。今度までは許せると思った。3 人の仲は今までとある部分を除いては特に変わったこともなく続いた。

相変わらず、ケンはモダン・ジャズに聞き入り、彼女は肩まで垂れた髪を時々、小指でかき揚げながらサロメの暗がりの中で本を読み、僕はタバコをイライラとふかしながら詩作に耽った。だが、彼女がもう決して僕のもとに帰ってこないだろうということが直感として解った。今迄アサヨは自分の傷を自分で癒せない小鳩であった。だが、今の彼女はもう小鳩ではなく、自分で自分の傷を嘗めて治せる立派な鳩に育っていた。これからの彼女は幾ら深い傷を負っても、もう親鳩のもとには帰って来ないだろう。彼女は強くなって、飛び出ていった。親というものは子供が何時大人に成長したのか少しも気づかず、何時までも子供にみえるものである。彼女にとって今までの僕は親鳩であった。愚かにも僕はそれを男としての位置と取り違えていたのだ。僕は自分を笑った。自分のバカさ加減が悲しく、可笑しかった。高く笑い声が昇っていき、その下から涙が止めなく流れ出た。空っぽの笑い声と、熱い涙が変に調和して青い 10 月の空に吸い込まれていった。最後に涙は枯れ果てた。

何時の日にか再び僕のもとにアサヨが帰ってきた時、僕は彼女の頬を思いきりひっぱたくのだ。それによって今度こそ、本当に彼女は僕のものになり、僕は彼女にとって男になるのだ。僕は涙で曇った網膜の中でアサヨの焦点の無い瞳がキラキラと光っているのを感じた。　ー終わりー

父母から聞いた話

須永 静江

母の話

私には、３つ年上の兄がいる。私が大学生になる頃、彼は、ちょうど、日立の電機会社(日立製作所)に勤め始めたばかりであったが、妹思いで、私に、定期的にお小遣いを送ってくれた。そして、「このお金は、本や学用品に当てるのではなく、パーティーやコンペなど遊び(社交)に使うためのものだよ。学費や本など勉強に使うためのお金は、父が出すのだから」と、念を押した。

私は、さほど社交的な人間でもなく、私の行った大学は割と地味であったので、あまり遊ぶ機会もなかった。総じて、英文科の学生は真面目でよく勉強したと思う。四季・折々の県人寮(栃木県県人寮は、東京・井の頭線の東大前にあった)主催のパーティーを多少楽しんだ他は、クラスの友だちと映画に行ったこと、長野県の白馬村の農家に泊まって夏休みを過ごしたこと、友だちと仙台旅行をしたことくらいで、遊びの経験は数えるくらいしかない。

ある時、夏の休暇で田舎に帰っていた時、私は母と二人きりだった。母は、座敷で繕い物をしていた。母は、思い出したようにポツネンと話した。それは、あたかも、独り言のようであった。

「父ちゃんが戦争から帰って間も無く。啓次は、廊下の障子に指で穴を開け、外を覗き見ながら、『あのおじちゃん、暗くなったのにどうしてうちに帰らないの？』と、言った」と言う。私の家は農家で、帰還した父は、庭か納屋で暗くなるまで働き続けていたのだろう。勿論、まだ幼かった兄は、片言の言葉で母に問うたのだと思う。

啓次とは、前述の、妹思いの、私より３つ年上の兄である。父が戦場に出掛ける前に撮った白黒の家族写真が一枚あり、その写真の中では、兄は、生まれて間もなくの赤ちゃん姿で、薄いケープを掛けられ、母の膝にきちんと抱かれて座っている。しっかりカメラを見つめているものの、今にも、泣き出しそうにも見える。おそらく、生後、３ヶ月半か４ヶ月くらいと思われる。どうしたことか？戦場に出掛ける父は写真には写っておらず、祖父(父の父)が母と並んで真ん中に写っている。祖母は、これより、１０年ほど前に亡くなっているので、当然、写真には写っていない。真ん中に祖父。向かって右隣に母。左隣に、お嫁に行く前の父の妹(叔母)が、姉(次女)を膝に抱いて写っている。祖父、母、叔母の大人３人は、着物に足袋・草履の和装で座って写っている。右脇に、小学校に上がる年頃の姉(長女)と左脇に彼女より１つ年下の兄(長男)が立って写っている。長男の兄は、胸に可愛らしい飛行機の編み込まれた暖かそうなセーターを着ている。長女の姉は、セーターに袖なしカーデガン、そして、スカートに超厚地のストッキング姿。ところが、兄は、素足で下駄。姉は、右の靴(破れている？草履？)と左の靴は別であるような物を履いている。「写真だよー。写真を撮るんだよー。急いで、一番いいカッコしておいで！」とでも言われたのだろう。急がされて、足の方まで手が回らなかったのだろう。長兄は、叔母に寄りかかって、恥ずかしそうにカメラを凝視。長女は、母の右横に、狐のように痩せた顎を斜めに突き出して、口をきつく閉じて立っている。彼女は、この時、父の居ない生活への不安を感じていたであろう。

私と弟は、父が戦場から帰って来てから生まれたので、当然この写真には載っていない。この写真は、１９４１年の秋の深まった頃に撮られたものだろう。父は、この写真を家族の大事な思い出として荷物の中に加え、この後、間も無く出征したのである。

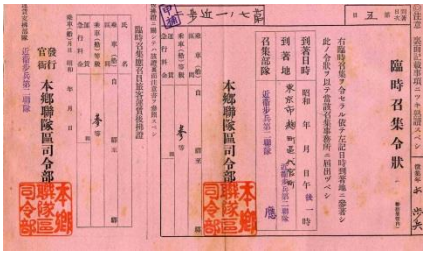
母は、父が１年と８ヶ月ほど戦地に行っていたと言っていた。とすると、父が戦争から帰った頃は、啓次兄はまだ２歳と少しくらいのものである。生まれて間も無く、父の顔を覚える暇もなく父に出征され、父の居ない家で育てられた。そこに、二年近く留守をしていた父親がひょっこり戦場から帰って来た。まだまだ、事の経緯(いきさつ)が分かる訳はない。よって、自分の父親も、よそのおじさんも変わりないのであった。

母は、帰還して間も無くの父に、この啓次兄の言葉を伝えたかどうか？ 私は知らない。もし、父が、子供の口から直(じか)にこの言葉がはかれるのを聞いていたら、どんなにか、胸を痛めた事であろう。

恐らく、戦争に絡んで、どこの家にも似たような話があるものと思う。私は、それを、聞きたい。戦争は、どこの家にも、悲しみを生み出すものである。

父の話

赤紙(赤紙は、大体、真夜中に来たらしい)が来ると、バタバタと慌ただしくその旨を近所に知らせ、出来る限りの親族に伝える。お別れに、会いに来てもらうために。


臨時召集令狀
昭和　年　月　日午後一時
東京市麹町區
歩兵第三一聯隊
本郷聯隊區司令部
本郷聯隊區司令部
發行官廳
本郷聯隊區司令部
歩兵第三一聯隊

私の父は、南方(なんぽう)の戦地に行った。１９４１年の晩秋か初冬に家を出たが、いつ、どこに行ったのか詳しくは知らない。ベトナムの話を聞いたような気もする。

１９４３年の初夏の頃、父の所属する聯隊は、一旦、日本に戻るようにとの指令を受け、三艘の船で日本に帰国することとなった。途中、海は荒れ、空からはアメリカ軍の爆撃を受け、三艘の船のうち、前と後ろは沈没。父の乗った真ん中の船だけ、無事に日本に到着したとの事。

到着後、ただちに身体検査があり、まだ若くて健康そうな(使えそうな)兵士は、再度、南方の別な戦地に送られたの事。父は、既に３３歳半ばを過ぎていて、もう老兵として扱われたらしい。それで運良く、再度、戦地に送られることなく、故郷の家に戻ったのである。

私はこうして、父の帰還後ほぼ一年して誕生した。それは、日本が１９４５年８月１５日に正式に降伏する一年も前の事である。

父が戦場から戻って来ると、我が家の毎日の生活は父を中心に営まれた。我が家は農家であったから、基本的な食料は自給自足でまかなわれた。私は、赤ん坊であり、やがて、幼い子供であった訳だが、育つ過程で、家族が食べ物に困った記憶は無い。もっとも、当時は、現在の贅沢さとは比べ物にならない食生活であって、「ここにあるものが全て。これが当たり前」であっただろうから、選択の余地はなく、ただ、満腹感さえあれば十分であっただろう。とにかく、私は遊ぶのに夢中だったのか、食べ物には全く関心がなかった。農作物以外の魚肉類はどうであったか？元々、栃木県は海無し県で、海の魚は魚屋さんでしか手に入らない。村一軒の魚屋さんは、母の同級生で、母に頼まれて買い物に行くと、とても愛想よくお相手してくれたので、私はこの使い走りが大好きだった。もしかしたら、魚屋のキーちゃんは私の母に少し気があるのかなー？と、思ったりした。それで、あるとき、母に、「魚屋のキーちゃんのところにお嫁に行けばよかったね？」などと言って、子供ながらに母をからかったりした。海の魚は、だいたい、一匹を二等分か四等分にして、皆で分けて食べた。私は、何時も、頭付きの上半分ではなくて、尻尾つきの下半分を選んだ。細っそりしていて、身がしまっているように感じたから。また、当時は、近くの川にフナ、ドジョウ、ナマズ、其の他の淡水魚がたくさんいたし、春になるとザルを持ってスカートのまま水に浸かり、シジミ採りを楽しんだ覚えがあるほど、佐野の自然は豊かであった。母は、家族の誰かが捕まえたり、前の家のお爺さん（神主さん）が釣りをして獲った川魚を、汁物や甘辛煮にして、「美味しい、美味しい。」と言って食べていた。私は、川魚は泥臭くて食べられなかった。肉は、まだ、肉食生活は行き渡っていなかった時代であるから、私は、牛肉も豚肉も味を知らなかった。我が家

では、鶏を飼っていたので、ニワトリが卵を産まなくなると、その鳥を料理して食べた。肉のみならず、腸も皮もきれいに洗い味付けして食べたので、ほとんど捨てる部分は無かった。

そんな頃、父は誰を相手に話をしていたのか？ 田んぼで、昼ごはんを食べていた時だったと思う。(家と田んぼとの距離は短く、歩いても１５分かそこいらであったが、天気の良い日は家に戻らず、田んぼで昼食。言わば、毎日がピクニックのようであった。）父は、次のような内容のことを言っていた。「帰還した兵士の中には、飛行機の音を聞くと、大急ぎで家に走り、布団の中に潜り込む者が居る」と。私は、

まだ、小学校に上がる前で、よく田んぼに連れて行かれ、畔に座って雲雀が空に舞い上がったり、飛行機が高く遠くに飛んでいくのを見送ったりしていた。私の世界は、家と家族と田んぼと近所の友だちでしかなかった。戦争の怖さなど知らず、のどかな田園生活の中に育った私の頭に、父の言葉が描く光景、「飛行機の音を聞いて、一目散に逃げる兵隊さん。家に帰って、布団の中に潜り込む兵隊さん」は、至極滑稽で、漫画のように面白かった。しかし、時を経て、今や後期高齢者ともなると、幼い頃の父の言葉を思い出すたびに、「飛行機の音を怖がって逃げ、布団の中に潜り込む兵隊さんの姿」は、いとも虚しく悲しいものに映る。父は、戦場の様子を私たち家族にほとんど話すことはなかったし、自分では、飛行機の音を怖がるなどの様子を見せなかったが、故郷に帰ってもなお、心の休まらない、この逃げ隠れする兵隊さんに、非常な共感を覚えていたのかも知れない。

最近、アメリカやイギリスで、帰還する兵隊さんに見られる精神病が 、PTSD (Post Traumatic Stress Disorder)として話題になっている。戦場で、敵を相手に、刻々と生死に直面する生活を強いられる兵士たち。極度の緊張状態で張りつめた神経は緩む時を知らない。その彼らが、突然、平常な社会に戻り、平和な家庭に戻る。そこには、もう、生死に直面する緊張感はない。また、軍隊の組織の中で、緻密に築き上げられていた同僚同士の暗黙の支援もない。精神は解放されて、家庭の中、地域社会の中、職場の中の穏やかな環境の中で、一人の社会人として、新しい生活を立て直して行かなければならない。この過程が上手く乗り越えられるか否かによって、社会復帰が無事になされるかどうかが決まる。突然の環境の変化に戸惑い、異常な行動を取ったり自殺をしたり、悲惨な結果に終わらぬよう、このような問題は、国の問題として、国民すべての責任と考えるべきであろう。

父は、帰還後、毎年開かれた「七五三(なごみ)会」と言う集まりに、何が何でも出席していた。１年８ヶ月間の日々を、生死の狭間で共に生き抜いた戦友との絆(きずな)は、他の家族の者には想像もつかない強いものであった。

父は、生涯の最後に、大腸癌でひどく苦しんで去った。その父が、癌と闘いながらの生活を、戦時中の体験に重ねて表現していたことがいくつかある。その一つは、食べ物が胸につかえて吐きそうになった時、それを、南方から帰還中の船旅の経験に重ねた。「吐いてはならない。無理にでも飲み込むのだ」との、学びである。荒れる海原。長期の船旅。船酔いした者が、食べ物を無理にでも飲み込まないと、身体は憔悴する一方で死に至るのだそうだ。「無理にでも飲み込むことで、消化がなされれば、体力は持ちこたえる」と言う、理屈なのだと思う。(この彼の学びが、他に通用するかは、別として）最後の最後に言った言葉は、「兵士は誰でも、故郷の家に帰って、畳の上で死にたがっていた」と、言うこと。そして、父は、病院で息をひきとることさえ嫌がり、「どうしても、家で」と、言うことであったから、家族の者は皆、大変な苦労をすることとなった。肉親の苦しみ・痛みは、即、家人の苦しみ・痛みとなる。末期の父を家で２４時間看病することは、家人とっても死に物狂いの闘いであった。

私は、日頃、「親孝行は、しても、しても、し尽くせるものではない」と言っているが、父の最後に関しては、我が家の誰もが悔いのないほどまでに尽くし、「父の希望を叶えてあげられた」と、思う。
因みに、「父ちゃんを、最後まで世話しなければ死ねない」と、言っていた母は、父を９２歳半で見送り、自分は、ピッタシ ９４歳で静かに生涯を閉じた。ピッタシ、と言うのは、彼女の誕生日は ２月２０日で、彼女は、奇しくも、２月１９日に亡くなったからである。こうして、二人は、見事に、我が家の長寿番付で最高位を占めてこの世を去った。

映画同好会を運営して来て思う事

渡邉道英

２０１４年、木下恵介監督作品『二十四の瞳』や『野菊の如き君なりき』の上映でスタートした私達「映画同好会」でしたが、その間６年の年月が経ち役９０本の名作、話題作の映画を見て来ました。印象的な作品としては「高倉健」「樹木希林」「八千草薫」さん達が逝去された後の反響があって、特別に彼等出演の映画を見てもらいました。こうした時の喫茶店に残っての映画談義は賑やかでした。ロンドンに住む会員たちのほとんどが、日本映画の全盛期（１９５０～１９７０）に青春を送った人ばかり、語らいの中に懐かしさと悲喜こもごもの思い出話も交じり、結構楽しい時を過ごせたと思いました。「光陰矢の如し」「始めあれば終わりあり」でこの私も〃よる年波には勝てず〃、連れ合いの信子の面倒を真剣に見たいとも考え、わずか残された人生を二人して歩んで見たいと考える昨今ではあります。そんな事もあって、年末１２月には、東映オールスターの『忠臣蔵』、お正月には『TOKYO オリンピック１９６４』二月は天才伊丹十三監督の大ヒット作品『タンポポ』そして、エンデイングの三月は今週の月曜日三月十六日（月曜日）黒澤明監督の代表作『用心棒』を最後の最後に上映をしました。言わばロンドンでの「JA 映画同好会」の第１期の幕を閉めました。そして今秋には新たな「NEW 映画同好会]が私の後継者達の手でスタートします。その節は映画愛好家の皆さまの御支援をお待ちしています。さて、最後に取り上げた黒澤明監督の『用心棒』ですが、丁度大学一年生の時でした。東京都学生映画連盟傘下の『東京教育大学映画研究会』の一員として活躍をスタートした時でした。何と言う事でしょう四国の片田舎から東京に出て、今や世界の黒澤明監督、名優「三船敏郎」「仲代達矢」を見ることができたのですからーーー。

映画同好会３月１６日: Farm Street Church

ところで最期にこの『用心棒』を企画したのはいささか私の映画に対するイメージと言いますか、理想といいますか、映画には色んな作品が在っていいし、「嬉しい映画」「楽しい映画」「悲しい映画」「考えさせられる映画」「ためになる映画」などなど多種多様。要は映画でしか表現できない領域に特化して欲しいと願うからです。この作品こそ私の映像美學を満足させてくれるものでしたからーーー。この作品はモノクロ仕上げ（黒白映画）で、カンヌ映画祭でグランプリを獲った『羅生門』（大映京都撮影所）も『七人の侍』もモノクロでした。次の作品『椿三十郎』から初めてカラー作品に挑戦したのです。そして『羅生門』で初めて名カメラマン「宮川一夫」と出会います。そのカメラワークの的確さ、若い頃からフィルム現像を学んだ宮川カメラマンの力量を知り、尚且つ時代劇映画の巨匠「伊藤大輔」「溝口健二」「衣笠貞之助」達のもと時代劇映画のカメラマンの技量を身につけた宮川さん、黒澤さんはまんまと永田雅一社長から世界一のカメラマンを借り受けたのです。

もともと、黒澤明監督（映画）の特徴は

⑴ヒューマニズムに徹した作風
⑵ダイナミックな映像表現
⑶マルチカム撮影方式並びにパンフォーカスを活用しての画期的な撮影スタイル
⑷完璧主義で妥協を許さない演出

であって、生涯３０本の作品を製作して来たが、その内１６本で三船敏朗とコンビを組んだことになる。黒澤監督は世界中の監督から尊敬されたが、殊にマカロニウエスタン＆アメリカンニューシネマの監督達に影響を与えた。

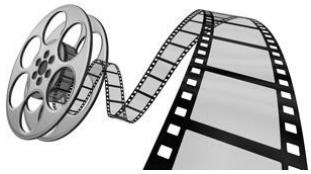
❶アンドレイ・タルコフスキー（『ぼくの村は戦場だった』『ストーカー』監督作品）
❷ステイーブン・スピルバーグ（『ジョーズ』『ＥＴ』インディ・ジョーンズ）監督作品）
❸ジョージ・ルーカス（『スター・ウォーズ』シリーズ６作『地獄の沈黙』監督作品）
❹フランシス・フォード・コッポラ（『雨の中の女』『ゴッドファーザー』1/2/3 監督作品）

■◉○■１９９０年日本人で初めてアカデミー名誉賞を受賞。
１９９９年タイム誌（アジア版）『今世紀最も影響のあった２０人』に選ばれた。死後ではあるが映画人で初めて「文化勲章」を授与され、さらに「国民栄誉賞」を勝ち得て「日本映画」が日本国民の心の中に深く根付いたことを証明した訳である。

■□上映作品の選定と当たりハズレ■
映画同好会で上映した作品リストを見ていると、

①戦前に活躍した監督
溝口健二監督　（『近松物語』『山椒大夫』『祇園囃子』）
衣笠貞之助監督（『地獄門』『小さな冒険者』）
小津安二郎監督（『彼岸花』『浮草』『秋日和』『麦秋』『秋刀魚の味』『東京物語』『お早う』）

②戦中大陸に参戦して撮影所に復帰して活躍した監督
森　一生監督（悪名十八番』『薄桜記』『次郎長富士』『ある殺し屋』『ある殺し屋の鍵』『不知火検校』）
黒澤　明監督（『天国と地獄』『椿三十郎』『七人の侍』『生きる』『用心棒』『蜘蛛巣城』『乱』）
木下恵介監督（『二十四の瞳』『野菊の如き君なりき』『喜びも悲しみも幾年月』『永遠の人』）
市川　崑監督（『ビルマの竪琴』『雪之丞変化』『おとうと』『東京オリンピック』『四十七人の刺客』『破戒』）
中村　登監督（『古都』）



③戦後映画界に入り撮影所の中核を占めたいわゆる戦中派
増村保造監督（『大地の子守歌』『刺青』『くちずけ』『華岡青洲の妻』）
山田洋次監督（『幸せの黄色いハンカチ』寅さんシリーズ８本など）
伊丹十三監督（『お葬式』『タンポポ』『マルサの女』『マルタイの女』）

日本人会『映画同好会』で上映された作品リスト
２０１４年
９月「二十四の瞳」（1954 松竹　木下恵介監督　高峰秀子 田村高廣　高峰三枝子　笠智衆）
１０月『野菊の如き君なりき』（1955 松竹　木下恵介監督　有田紀子　田中晋次　笠智衆　杉村春子）
１１月『ペペルモコ』（1937 仏　ジュリアンデユヴィビエ監督　ジャンギャバン）
１２月『幸せの黄色いハンカチ』（2010 松竹　山田洋次監督　高倉健　倍賞千恵子　武田鉄也 桃井かおり）
２０１５年
１月『あなたへ』（2012 東映　降旗康男監督　高倉健）
２月『太陽がいっぱい』（1960 仏　ルイ・マル監督　アランドロン　M ラフォーレ）
３月『天国と地獄』（1963 東宝　黒澤明監督 三船敏郎　山崎努　仲代達矢　志村喬　香川京子）
４月『ドクトル・ジバゴ』（1965 デヴィッド・リーン監督　）
５月『無法松の一生』（1958 東宝　稲垣浩監督）
６月『ニューシネマ・パラダイス』（1989 伊　ジュゼッペ・トルナトール監督）
７月『眠狂四郎多情劍』（1966 大映京都　井上明監督　市川雷蔵　水谷八重子）
『悪名十八番』（1968 大映京都　森一生監督　勝新太郎　田宮二郎　安田道代　森光子）
８月『ビルマの竪琴』（東宝　市川崑監督　水嶋道太郎　）
９月『彼岸花』（1962 松竹　小津安二郎監督　佐分利信　田中絹代　山本富士子　有馬稲子　浪花千栄子他）
１０月『薄桜記』（1959 大映京都　森一生監督　市川雷蔵　勝新太郎　真城千都世）
１１月『男はつらいよ』（1969 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　志村喬　森川信　三崎千恵　三本幸子）
１２月『忠臣蔵』（1958 大映京都　渡辺邦男監督　長谷川一夫　市川雷蔵　勝新太郎　京マチ子　山本富士子　若尾文子他）
２０１６年
１月『次郎長富士』（1959 大映京都　森一生監督　長谷川一夫　市川雷蔵　勝新太郎　京マチ子

山本富士子他）
２月『浮草』（1959 大映東京　小津安二郎監督　中村鴈治郎　京マチ子　若尾文子　川口浩他）
３月『椿三十郎』（1962 東宝　黒澤明監督　三船敏郎　仲代達矢　加山雄三　団令子）
４月『近松物語』（ 1954 大映京都　溝口健二監督　長谷川一夫　香川京子 南田洋子）
５月『祇園囃子』（1953 大映京都　溝口健二監督　小暮美千代　若尾文子　進藤栄太郎　浪花千栄子）
６月『古都』（1963 松竹 中村登監督　岩下志麻 吉田輝雄　長門裕之　東野栄次郎　宮口精二）
７月『夜の河』（1956 吉村公三郎監督　山本富士子 上原健　小野道子　東野栄次郎　市川和子）
８月『四十七人の刺客』（1994 東宝　市川崑監督　高倉健　中井貴一　宮沢りえ　石坂浩二
浅丘ルリ子）
９月『雪之丞変化』（1962 市川崑監督　長谷川一夫　香川京子）
１０月『細雪』（1959 大映京都　島耕二監督　京マチ子　山本富士子）
１１月『おとうと』（1960 大映東京　市川崑監督　岸恵子　川口浩　田中絹代　森雅之）
１２月『男はつらいよ寅次郎紅の花』（1995 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子 浅丘ルリ子）
２０１７年
１月『青い山脈』（1949 東宝　今井正監督　原節子）
２月『五弁の椿』（1964 松竹　野村芳太郎監督　岩下志麻）
３月『愛の日の愛のかたみに』（1965 大映東京　富本荘吉監督　若尾文子　船越英治）
４月『連合艦隊司令長官山本五十六』（1968 東宝　丸山誠治監督　三船敏郎　松本幸四郎
辰巳柳太郎　加東大介）
５月『小さい逃亡者』（1966 大映東京　衣笠貞之助監督　川間健　藤巻潤　宇野重吉　宇津井健
京マチ子　安田道代）
６月『なみだ川』（1967 大映京都　三隅研次監督　藤村志保　若柳菊　細川俊之　戸浦六宏
藤原鎌足）
７月『ある殺し屋』（1967 大映京都　森一生監督　市川雷蔵　成田三樹夫　小池朝雄　高松）
『ある殺し屋の鍵』（1967 大映京都　森一生監督　市川雷蔵　成田三樹夫　佐藤友美　西村晃）
８月『エデンの東』（1954 米国　エリア・カザン監督　J ・デイーン　ジュリーハリス）
９月『男はつらいよフーテンの寅』(1970 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　新珠三千代
香山美子)
１０月 『喜びも悲しみも幾年月（1958 松竹　木下恵介監督　佐田啓二　高峰秀子　桂木洋子）
１１月『ゴッドファーザー』（1972 コッポラ監督 マーロン・ブランド　アル・パチーノ）
１２月『秋日和』（1960 松竹　小津安二郎監督　香川京子　杉村春子 大坂志郎　加東大介）
２０１８年
１月『富士山頂』（1970 石原プロ　村野鉄太郎監督　石原裕次郎　渡哲也　勝新太郎）
２月『男はつらいよ寅次郎と殿様』（1977 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　嵐寛寿郎
三木のり平）
３月『伊豆の踊子』（1963 日活　西河克己監督　吉永小百合　高橋英樹　浪花千栄子　大坂志郎）
４月『マルサの女』（1987 伊丹プロ　伊丹十三監督　宮本信子　山崎努　津川雅彦　大滝秀治
岡田茉莉子）
５月『大地の子守歌』（1976 大映東京　増村保造監督　原田美枝子　佐藤佑介　岡田英次　田中絹代）
６月『麦秋』（1951 松竹　小津安二郎監督　原節子　司葉子　金子信夫　笠智衆　佐分利信）
７月『男はつらいよ寅次郎あじさいの恋』(1982 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　石川さゆり）
８月『次郎長富士』（1959 大映京都　森一生監督　長谷川一夫　市川雷蔵　勝新太郎）
９月『七人の侍』（1954 東宝　黒澤明監督　三船敏郎　志村喬　千秋実　西村晃　木村功　津島恵子）
１０月『お葬式』（1984 伊丹プロ　伊丹十三監督　山崎努　宮本信子　菅井きん　大瀧秀治
江戸家猫八）
１１月『男はつらいよ寅次郎の縁談』（1993 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　松阪慶子）
１２月『秋刀魚の味』（1962 松竹　小津安二郎監督　岩下志麻　笠智衆　佐田啓二　岡田茉莉子
三上博史）
２０１９年
１月『弁天小僧』（1958 大映京都　伊藤大輔監督　市川雷蔵）　『京鹿子娘道成寺』
2 月『破戒』（1962 大映京都　市川崑監督　市川雷蔵　長門裕之　船越英二　藤村志保　三國連太郎

岸田今日子）
３月『生きる』（1952 東宝　黒澤明監督　志村喬　小田切みき　伊藤雄之助　金子信雄　）
４ 月『男はつらいよ望郷編』（1970 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　長山藍子　松山省二　井川比佐志）
５月『山椒大夫』（1954 大映　溝口健二監督　田中絹代　香川京子　花柳喜章　進藤栄太朗）
６月『張込み』（1958 松竹　野村芳太郎監督　大木実　宮口精二　高峰秀子　田村高広　高千穂ひづる）
７月『秋津温泉』（1962 松竹　吉田喜重監督　岡田茉莉子　長門裕之　山村聡）
８月『男はつらいよ旅と女と寅次郎』(1983 松竹　山田洋次監督　渥美清　倍賞千恵子　都はるみ)
９月『地獄門』（1953 大映　衣笠貞之助監督　長谷川一夫　京マチ子　山形勲 黒川弥太郎）
１１月『時代屋の女房』（1983 松竹　森崎東監督　渡瀬恒彦　夏目雅子　平田満　朝丘雪路　津川雅彦）
１２月『忠臣蔵』（1959 東映、松田定次監督　片岡千恵蔵　中村錦之助ほか東映オールスター）
２０２０年
１月『TOKYO オリンピック 1964』（市川崑総合監督 宮川一夫カメラマン、碧川道夫カメラマンほか）
２月『タンポポ』（1985 伊丹プロ　伊丹十三監督　宮本信子　山崎努　役所広司　渡辺謙　津川雅彦　大友柳太朗）
３月『用心棒』（1961 黒澤プロ　黒澤明監督　三船敏朗　仲代達矢　東野英治郎　山田五十鈴　司葉子　加東大介）

以上です。この他ピカデリーサーカスのラーメン屋４Ｆなどで『ローマの休日』『恐怖の報酬』『椿三十郎』『壬生義士伝』『万引き家族』等数本上映した記憶があります。

裏話
フィルムのエキストラ・ちょいの間役

早乙女健之

以前フィルムのエキストラと言う題名で掲載しましたが、今回はその 2 段目の話です。エキストラのことを業界では SA（Supporting Artist）と言っています。エキストラよりもずーっと響きがいいでしょう。

衣装合わせ

ちょいの間役のときは、衣装はすべて Production の衣装係が揃えてくれます。私が London has Fallen で日本の総理役をした時 Regent Street の Austin Reed で背広、シャーツ、ネクタイ、靴すべてをそろえました。その値段の高さに驚きました。撮影の時は私車の後部座席に座っていたので一足数百ポンドの靴をはかされたのですが、私の上半身しか映りませんでした。

ちょい役

だいぶ昔ですが、私が日本の大使役での話です。（Coded Bank II）Make up　と衣装合わせがすみ、撮影現場に入り、私の隣が、Tony Blair その隣が、Queen Elizabeth　でした。私の妻(日本人の女性―朝 Make up しに行ってきますと挨拶した人)がいつまでたっても私の横にきません。　そこで、監督が、中国服を着た韓国人を座らせて撮影を始めてしまいました。　撮影中楽団の音楽がなりわたっているさなか、監督が私に手招きをして、テーブルの上に上がって踊れとのこと。私はいわれるまま、白いハンカチをまわしながら、テーブルの上で踊りまくりました。まったく台本にないものでした。

去年春に BBC2 で放映された、Do not forget the driver の読み合わせでは、私は台本どうりに Geoffrey Chaucer の Canterbury Tales の詩と Dialogue　を覚えてその読み合わせに行きました。

ところが私に渡されたのは、Chaucer ではなく William Shakespeare の詩と Dialogue です。　自慢じゃないけれど今まで Shakespeare の詩なんか読んだことも見たこともありません。私自身どうゆうふうに発音して読むのか全くかわからないので、隣の人に教わりカタカナで書き込みました。いざ自分のところにきたので、意味もわからず、カタカナの書き込みを読んだのがやっとでした。当然自分がなにを読んでいるのか全くわからずでした。　やっとのことで読み合わせが終わり、ああまた新たに覚えなおさなければと思っていたところ、監督が私にきて、セリフをちゃんと言えるようにしてくださいと言ってきました。勿論わかってますよ。　完全に発音もいみも全くわからなかったからね。後でわかったことですが、Canterbury　Cathedral　は修復中だった為、撮影できないので場所を変更したとのことでした。私にとっては全くいい迷惑でした。　ええ撮影は Hampton Court と Bognor でした。

Voice Over

Do not forget the driver の撮影が終わってから後日連絡があり Voice over をする場所にいきました。私の発音が悪いのか何がわるいのか、Iambic Pentameter(弱強五歩格)の箇所を何回もいいなおし。ええ私だけではありませんよ、一緒にとった人々(英国人)も来ていてセリフのいい直しとか訂正等々をしていました。

戦艦ヤマトの設計者　平賀譲（ひらが　ゆずる）役をやった時、せっかく片言の英語で撮り終わったのに、その後呼び出しがあり、英語から日本語の Voiceover。それと船の船首の下の所が突き出ているところ（ばうばいばす）の説明で効率的にスピードが違う所を後になって訂正されました。

BBC　Radio

だいぶまえになりますが、２０１１年３月東北大震災のとき、津波で海に流された人の話です。　製材業の会社に働いていた人が海に流されたとき家の屋根が流されていたので、その家の屋根で２日間すごしていたところを救出された話を BBC の人が仙台に行き実際に取材した話を救出者になって英語で話す仕事でした。最初の４-５枚は事前に Email で送られ出来てましたから、なんとかすら

すら読めましたが、録音しているところでさらに数枚持ってこられ、これもとのこと、なんどか発音を直されました。　海に流された人が、夜、満天の星空、海面にはホタルイカが屋根の周りにきらきら光っている。その人は西郷輝彦の星のフラメンコを歌った。そしたら録音している人が私に星のフラメンコを歌ってくれとのこと。私が歌い始めたら、Thank you　途中で遮られてしまいました。あ、あ、あ、ごもっとも。ごもっともと思いました。私の音痴がばれてしまった瞬間でした。

楽しかった事

私は Cape Town に２回映画の撮影でいきました。２回とも撮影後数日観光を堪能しました。一回目は Mandela Hotel 滞在。衣装合わせ半日、撮影一日で終わりました。その後、毎日運転手つきでドライブ、Table Mountain に行ったり、遠出のドライブ，夕方は町のレストラン等々。五日間、朝昼晩運転手付きでの観光三昧でした。Prague にはコマーシャルでやはり２回いきました。一回目は三日間 Free でしたが二回目は Free な日はありませんでした。

ひどかった時

コマーシャルの撮影で Manchester に行った時。仕事は３泊でしたが毎日ホテルが変わりました。最後の日は Travel Lodge のホテル。Check　in　しようと思ったら誰もいません。ベルをならしてよんだら、私の部屋が Book されていないのです。早速 Production の人に電話してきてもらいました。空き部屋なし。一部屋だけあるが・・・、最終的にはその部屋に泊まることになりました。大きな部屋にベット４個ありました。Bath room　の Bath tub はそこが浅くひどいところでした。ホテルなのにそのホテルには朝食を食べる食堂はありませんでした。ホテルの周りをチェックしましたが、日曜日なのか、朝は１０時からのこと、撮影は早かったので、朝食なして撮影でした。いままでこの仕事を長年やってましたが、エキストラであれ、ちょい役であれ、朝食は必ず用意されていました。朝食抜きというのは初めてでした。

Glasgow に映画の撮影に行った時の事

電車で Glasgow にいきました。駅で運転手が私を待っているはずでしたが、みあたりません。運転手に電話したら、Glasgow の駅のどこか色々説明をしてもわからずじまい。約３０分ぐらいいろいろな所の説明をし、周りを歩いて大きな広場に出たので、その場所の説明でやっとみつかりました。ようやくホテルに着き疲れたのでビールをホテルのバーで飲み床につきました。　翌朝早いので朝食を終えたら運転手がホテルの前で私をまっていました。撮影現場に着きすぐに背広に着替えさせられ、撮影、また柄ちがいの背広に着替えて撮影、等々くりかえし。ほとんど休む間もないくらいでした。夜やっと撮影が終わり着替えていると、また呼び出され着替えさせられ、撮影、いい加減にしてください・・・。

インドの映画 Badla(Revenge という意味だそうです)　という題名の映画だったのです。映画のクルーはほとんどインド人です。ランチのカレーは本当においしかったです。　私の役の名前は藤田でした。どうでもいいが Glasgow　Airport に車を走らせ、最終便の Heathrow 行き時間すれすれでまにあいました。EasyJet、喉が渇いたので Tea を飲もうとしたら、お金をはらわさせられました。　私にとっては初めての経験でした。　夜遅くやっと Heathrow Airport に着いたら、私の名前を書いた札をもっている人（運転手）が見つかりません。携帯電話でその人の番号を呼びやっと

あえました。彼はだいぶ長い間私を待っていたとのこと。やっとのことで我が家についたのは真夜中、長い一日の終わりでした。

撮影場所の控室

映画の場合。SA の人たちは大きなトレーラーの中で皆さん一緒に控えています。Casting で選ばれた人は自分の役名が貼ってある　トレーラー　(シャワー、トイレ、洗面台、ソファー、TV 等内装われている)に一人ではいります。　食事も場合によってはそのトレーラーにもってきてくれます。衣装合わせの係の人メイクアップしてくれる人も SA 担当者とは別の人が専属にしてくれます。　本当に格差社会的なところです。時々隣のコンパートメントで役者が一生懸命 Dialogue の練習している声が聞こえてくることもあります。私はあまりそうゆう所がすきではないので、SA のいる所に行って皆と話をしたりします。

後談　SA と Actor

衣装は SA のばあいは自分のものを持参、ただし、時代物や、とくべつな衣装の時は Production がそろえます。Actor の場合は１００％Production のほうで手配します。撮影場所までは SA の場合自分で行きますが、Actor の場合は自宅まで送り迎えしてくれます。撮影場所と食事するところが異なる時よくあります。その時も SA の人々は小型バス、Actor は乗用車で撮影現場から食事をする所まで移動します。食事も SA の人達は一番最後になります。SA の人たち何人かはメニューにあるのに残っていないときがあります。

撮影終了後の打ち上げには SA は招待されません。私は両方（SA,　Actor）経験していますので、あああこの業界はゆるぎない格差社会なのだと思います。

余談

撮影スタート時　英国では　Set　Start といいます。
日本では　よーい　Start　(なぜ　よーい　ドン(または　始め)じゃないの。　柔道では　始め、と言います。　私は、坂の上の雲、Manchester　で撮影した時にこれを体験しました。

英国では　撮影時の昼、英国の Crew (撮影関係者)は昼食で酒類（Wine 等）飲みません。フランスの Crew は昼食時みんなで Wine と一緒に食事します。

国によっていろいろ違うものですね。

越前、能登そして飛騨へ

小川のり子

１１月も半ば過ぎと言うのに越前の空は意外に青く澄んでいた。先程、観光案内所で見つけた奇妙な名の景勝地、東尋坊に寄り道と決め、日暮れ前にと一路北に急ぐ。旅好きな私は、今まで日本の各地を訪れたつもりでいたが、次から次に“未踏の地”が現れる。近頃は出来る限り空白の地を埋めようと、国よりもらった無粋なレッテル“後期高齢者”をしり目に、足腰を叱咤激励することしきりである。

北陸自動車道を金津で下りて約１時間、ようやくたどり着いたかの地は、最初、「あれ、デジャヴかな」と一瞬わが目を疑う。荒波を背景に海面に柱状の岩石が林立する光景を、いつか訪れた北アイルランドのジャイアンツ・コーズウェイとに重ねたからである。おそらく海底の火山岩が、波の浸食を受けて地上に現れるという同じような過程を経て来たのであろうか。それにしても、外国の景色を日本の景色にダブらせるほど、自国を長く留守にしているのかと、ちょっぴり感傷的になってしまう。

東尋坊（とうじんぼう）は崖の上から、波間に林立する岩石群を一望のごとく見渡すことが出来るので、目線が海面に近いアイルランドのそれに比べ、スケールがより大きく感じられた。足場に気を付けつつ波打ちぎわまで下りて、ふと見上げた崖の上の人々が、古い西部劇映画で忽然と現れるアパッチ族の来襲、を思い起こさせてしまう。この突飛な連想に、もっとも襲撃前触れののろし（狼煙）は上がらなかったが、これはどんな心のいたずらかと可笑しくなってしまう。

物の本によればこの変わった地名の由来は、乱暴者の上に、色恋のもつれからも恨みをかった平泉寺の僧、東尋坊が酒盛りの最中に仲間たちにこの崖から突き落とされた・・・とある。こうして彼の名を残したのはせめてもの弔いの為だろうか。昨今は、自分で自分を突き落す、自殺の名所にもなっているそうだ。すぐそばの松林には、つわぶき（石蕗）の黄色い花が一面に咲いていた。晩秋から初冬にかけて咲くこの花は、そのつややかな蕗に似た葉と共に、私に日本を思い起こさせるくれる植物の一つでもある。

金沢市街を西に抜けると、のと里山海道につながる。日本海を左手に眺めながら一気に能登半島を北上するこの自動車道はすこぶる快適。車の数が少なく人家もまばらで、森や林が次々と現れては消える、まさに海と森の道。旅の楽しみの一つは高速の休憩所で、ここではその土地の名産物が店頭に並び、また食事処でもある。“道の駅”とも呼ばれ大型店では、カニ飯やキノコ飯など旬の料理を出してくれる時もある。今日は朝から曇り空だったが、ぽつりぽつりと降り出した雨はやがて大粒となり、ワイパーに邪魔されながらも、右に左へと滝のようになって流れ落ちる。大急ぎで「千里浜」と呼ばれる道の駅に避難したが、駐車場から店内までの２～３メートルでずぶ濡れになってしまった。外を眺めると、先刻まで鈍色に輝いていた海は今では空との境界線を失い、巨大な一枚の降り注ぐ雨のスクリーンとなり、時々、その上を稲妻が華やかに走り去って行く。雷鳴を伴うこの雨のラプソディーを聴きながら、何となく旅の遣る瀬なさを味わいつつ、熱いコーヒーで体を温めた。

のと里山海道の終点から珠洲（すず）街道で進路を東に取ると、小さな海辺の町、宇出津（うしつ）に辿りつく。ここには「能登うしつ荘」と言う国民宿舎がある。国民宿舎は若い頃によく利用した宿であったが、何となく社会主義国家の趣。２１世紀になってもその呼び名が残っているのが、少々アナクロながら面白いとも思えた。季節外れのせいか団体客もなく大広間の食堂は我々を入れて４組の客のみで、おそらく従業員の方が多いのかも知れない。おかげで、温泉の大浴場を一人占め出来たのは幸い。抜き手を切ってスイスイと泳ぎ回ったというのはウソであるが、湯船に長々と体を横たえながら鼻歌も飛び出し気分上々。“金を湯水の如く使う”チャンスは私には皆無であるが、せめてもと溢れんばかりの“湯水を湯水のごとく”と何杯も使いながら、ふと祖母の口癖、「ああ勿体ない」が飛び出した一時でもあった。

窓を開けると林の向こうに九十九(つくも)湾が見える。昨日とは打って変わって晴れ上がった空は雲一つなかったが、ここはやはり能登の国、いぶし銀のような色合いの海が遠くまでしめやかに広がっていた。宿からしばらく車で走ると恋路海岸に辿り着く。縁結びのパワースポットとあるので、「今更」、とは思ったが一応訪れてみた。何でも悲恋物語が残る海岸で、伝説の２人が寄り添う銅像やハート型の「幸せの鐘」が設置されていた。他に２～３組の若いカップルがやって来たが、おそらく老人組はここまで遠路はるばる足を延ばす必要がないか、又は出来ないのかもしれないと、勝手に納得させてしまう。この近くには見附島（軍艦島）という景勝地もあり、弘法大師との関係が詳しく案内ボードに書かれていたが、途中で止めて波打ち際まで歩いてみる。ここにもハート型の「幸せの鐘」があり、その前で老夫婦から「写真を・・・」と頼まれた。「そうか」、このような場所では気取らずに手をつないで写真に納まるのも悪くないのかもと思いつつシャッターを押した。

近くにある変わった名の狼煙(のろし)町のことも少しばかり。この町は能登半島の最北東端に位置し、岬の先端に禄剛崎灯台がある。天気が良いとここから佐渡島が見えるらしい、があいにく、先方が曇っているせいか、島影一つみえなかった。自生の椿が自然歩道に繁殖し、折角の海の眺望をところどころ隠していたが、花の季節はさぞかし見事な景観だろう。さきほど息を切らして上った坂道の真下に、道の駅、“狼煙”があり、そこでわら草履ならぬ布草履を一足買い求めた。色とりどりの布切れで編まれたそれが目に鮮やかだったので買ってしまったが、後で、「断捨離の誓いは何処に」と嘆くことしきり。
蛇足になるが、町名に使われている“のろし”とは物を焼いて煙を上げ、離れたところに合図することだが、それでは何故、狼の煙と当て字が使われるのか少々気になった。出所は確かではないが、わらなどを焼くおり、狼の糞を混ぜて焼くと煙が垂直に上がり相手側が見つけやすい・・・という説があった。昔は、この能登半島の北端にも狼が多く生息していたのかも知れない。

山間(やまあい)に深く囲まれ、近年まで“陸の孤島”と呼ばれた白川郷は、観光客で大賑い。ユネスコ世界文化遺産にも指定されている合掌造りの集落には、そのほとんどが外国からと見受けられた旅行者が、ここかしこで“V サイン”のポーズをとり、土産物屋や食べ物屋にも群がっていた。先刻もらった地図に「ゆっくりと歩いてみよう白河郷」のうたい文句が何となく空々しい雰囲気である。外国人の落してくれるお金が国の経済を潤してくれるのは大歓迎だが、だからと言って我々日本人が片隅に小さくなるのは・・・と思った。がその瞬間、この私も DNA は別としても税制上は外国人の一人かもと思い直し、嬌声を発する若者のグループを睨めつけた。
茅葺(かやぶき)の屋根が掌(てのひら)を合わせて山形を造ったような姿を見せるので「合掌造り」と呼ばれるそうだが、この建築物の中は意外に広い。その内の一つ“長瀬家”と呼ばれる家を訪れたが、なんと五階建、檜、桂、栃、欅の建築材料は全て植物で、金属の釘やかすがいは一切使われていないそうだ。２６０年も続くと云われるこの旧家には、黒光りする天井に、壁に、廊下に、階段に深く歴史が刻みこまれ、いまだにかつて住んでいた人々の霊がそこここに潜んでるような雰囲気を漂わせていた。
屋根の一部を修復中の家に出くわしたが、材料の茅とはススキであり、屋根の片面だけでも一万二千束必要との事。両面を葺き替えると日本中のススキが無くなるのではと少々心配になった。このススキも私に日本を思い起こさせてくれる植物の一つであるが、ロンドンの庭に植えたのは毎年穂が出ない。

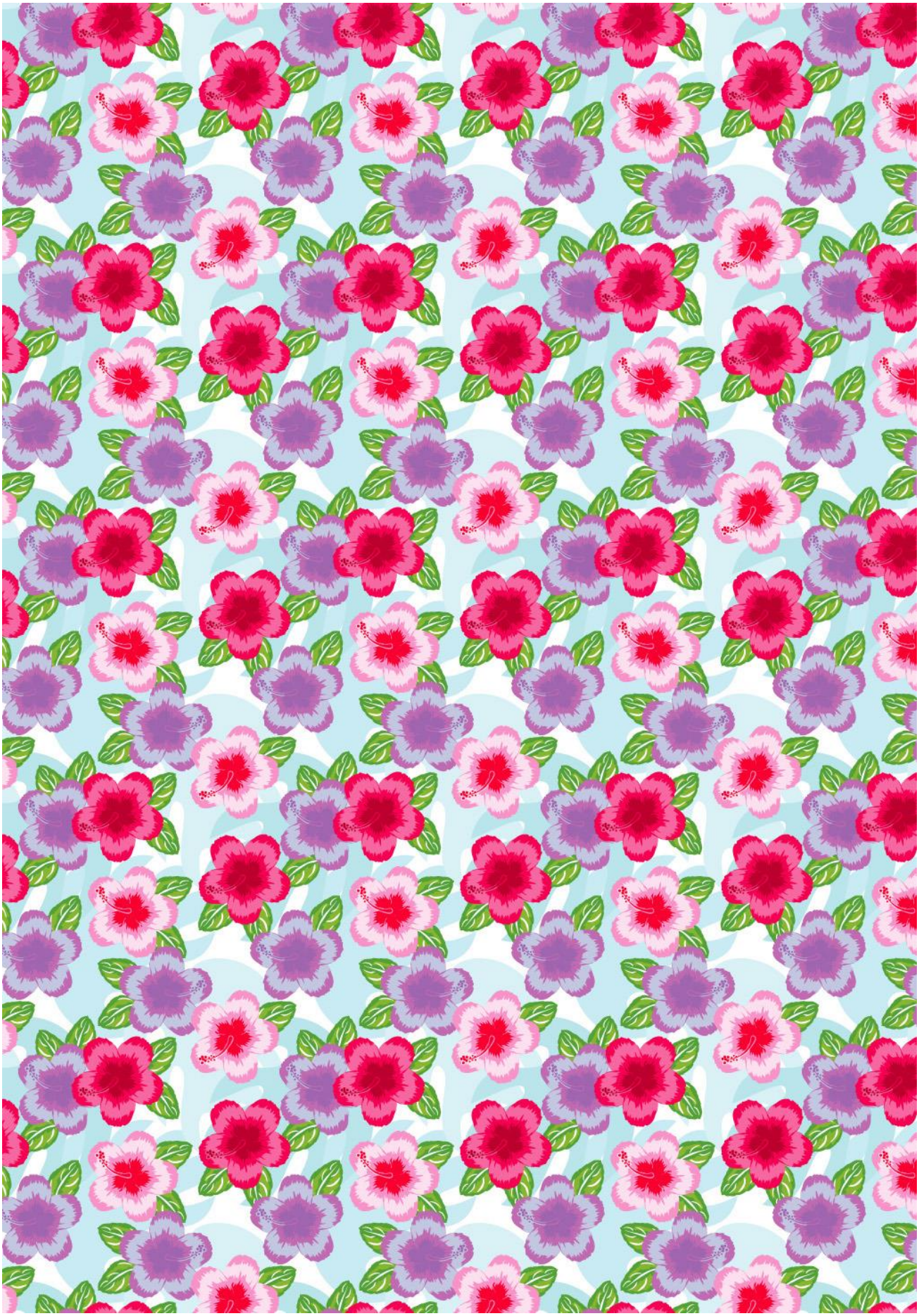
日暮れ前に高山に到着。“飛騨の高山”と呼べば何となくロマンを感じるのはどうしてだろう。事前に何も調べずホテルだけ予約して出かけて来たが、この温泉郷に囲まれた町並みは意外に静かで、最初はさびれた印象さえした。商店街を抜けると小さな橋のたもとに「飛騨牛鍛冶屋橋」という看板が張り出された食事処があり、驚いたことには店先に１０名近くが順番を待っていた。どちらかと言えば私は魚料理を好むが、飛騨では飛騨の名物とお薦めの「飛騨牛重」を注文。久しぶりに口にするうす切りの牛肉が溶けるように柔らく、かみしめると旨味がふわーっと口中に充満。店を出てまだ唇に残る牛重の味を楽しみながら、この町も悪くはないと最初の“さびれた印象は”取り消すことにする。ヨーロッパを旅して、時々ミシュランガイドの星印を参考にすることがあるが、ここは少なくとも星印二つ以上の評価だろうか。翌日、伝統的な建造物が保存されている三町を訪問。その古い佇まいに旅の詩情が甦り、“ロ

マンの薫る飛騨の高山”が次第にその姿を見せ始めた。この界隈は古い町並みが残り、小奇麗な土産物店、飲食店、物産店とほとんどが観光客相手の店々。我々が呼びこまれた蜂蜜屋では、何十種類の蜜の中から、何故かしら国産ではなく、ニュージーランド産のマヌカ蜂蜜を薦められ、試食までさせてもらったが、値段を聞いて慌てて飛び出してきた。

奥飛騨温泉郷の一つ平湯に向かって出発。途中より篠突く雨に出会い、乗鞍、穂高、槍が見渡せるロープウェイは諦める。平湯温泉では地表にうっすらと湯けむりが立ち、忘れられたような片隅に“女湯”、“男湯”とのれんのある露天風呂があった。入り口に小さく、「ご自由にお入り下さい。出来れば５０円ほどの清掃代を」と書かれていたが、その“高額の請求”に思わず頬が緩んでしまう。傍でどうすべきかと決めかねていた初老の外国婦人がいたので、話しかけた。しばらくぶりで英語の会話が出来たので嬉しかったのか、その人は立て続けに喋りだした。イギリスはオックスフォードに５０年近く住んでいるが実はフランス人。主人はイギリス人で言語学の教授、自分はフランス語の教師。退職して暇が出来たので、前から訪れてみたかった日本に一人でやってきた。東京や大阪の大都会には興味がなく、山深い飛騨の里に魅かれてやって来た・・・と土地の人が聞けば歓声を上げんばかりの賛辞が続いた。

高山から東海北陸自動車道を南に１時間ばかり下ると、長良川の傍に郡上八幡（ぐじょうはちまん）という町がある。今までこの町の存在すら知らなかったが、郡上八幡城という小規模ではあるが山城があり、ここから見下ろす城下町の眺めは非常に素晴らしい。司馬遼太郎の「街道をゆく」では「日本でもっとも美しい山城・・・」とあるそうだ。丁度もみじ祭りの最中で、城の周辺に植えられた４０～５０本のもみじの木々が真っ赤に色付き、天守閣の白壁を焔に包み込むかのごとくであった。城炎上は、過去の戦で幾度かこの城が辿ってきた運命なのだろうが、毎年、秋の終わりにこうして紅葉の焔で炎上するのはお城にとって、決して悪い定めではないだろう。鵜飼のシーズン中は多くの観光客が訪れると聞くが、１１月も終わりに近づけばさすがに町中はひっそりしていた。各地で必ず出会った外人客をここでは全く見かけることはなかったが、強いて言えば、ロンドン在住の日本人客一組が町中をうろついていたようである。

『英国春秋』　　２０２０年春号（Ｎｏ．３６）

編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o JEIB
3 London Wall Buildings
London EC2M 5PD
原稿の送り先　ogawa@japanassociation.org.uk

本日、雲一つない晴天ですが、コロナウィルスの高波が荒れ狂っています。勇敢に戦いたいのですが何しろ敵は姿を見せないので、防衛あるのみです。室内で『英国春秋』を片手に、呑気に構えるのも一手かも知れません。猛威を振るう高波が収まるまで、皆様、くれぐれもご自愛くださいますように。（２０２０年３月）